

# 鮎川信夫と『新領土』(その5)<sup>1</sup>

中 井 農

## 20. 詩人たちの旅

1938年1月21日、W・H・オーデンとクリストファー・イシャーウッドはマルセイユから出港した。翌2月28日に香港に到着し、ただちに広東省へ向かった。

彼らが船旅をはじめた頃、1月29日、東京詩人クラブの主催で「詩の夕」が開催された<sup>2</sup>。鮎川が『新領土』の同人となるのは翌2月である。オーデンたちが船旅を終えた二日のち、彼の手許に最初の作品「遊園地区」を載せた『新領土』3月号がとどく。彼はつづいて「亞細亞」詩篇<sup>3</sup>を書き始める。他方、『セルパン』を刊行する第一書房は『大地』の増刷に追われていた。国家総動員法が施行されたのが5月5日のことである。

オーデンとイシャーウッドが目的地での取材を終えて、上海から *Empress of Asia* で帰途についたのは6月12日であった。漢口作戦がはじまった翌日である。二日後に長崎に寄港し、神戸で下船した彼らは、汽車で東京に向かった。帝国ホテルに一泊した二人は、翌日18日午後、横浜港に寄港中の同船に合流して太平洋を渡った。28日、ヴァンクーバー着。10日の船旅であった。さらに、二人は鉄路でニューヨークに向かい、ここに約二週間滞在した。大西洋を経て帰国したのが7月17日である<sup>4</sup>。彼らの世界一周の旅は、わが国でほとんど注目をあびることなく終わる。

「八十日間世界一周の旅」でわが国をわかせた文学的事件は、二年前、1936年のジャン・コクトオの来日である。彼は友人を伴い13月28日にパリを出発した。最初の地、ムッソリーニ政権下のローマは、エチオピアの首都占領を伝えていた<sup>5</sup>。地中海からスエズ運河を経由して彼は東へ向かい、シン

---

「言語文化」6-1 : 1 - 90ページ 2003.  
同志社大学言語文化学会 ©中井 農

ガポールに到着する。5月5日、ここからコクトオは日本郵船の鹿島丸に乗船し香港に向かう。香港からアメリカ船プレジデント・クーリッジ号で神戸へ向かったのが5月11日のことである。この船にチャップリンが同船していることを知り、コクトオは歓喜する。『モダン・タイムス』を撮り終えて、シンガポールで結婚したポーレット・ゴダートを伴ったお忍びの旅であった。15日、神戸着。若き日の淀川長治が大阪から出かけて、停泊中の船にチャップリンを訪れ会見<sup>6</sup>するのはこの時である。淀川は神戸港からゆっくりと出てゆく船を見送る。

コクトオは神戸で下船し、「ロオレエンの景色のやうな田舎をよこぎつて着いた」のが「京都の宿」、都ホテルであった。京都での歓待のあと、東京に向かい帝国ホテルに宿泊する。20日夜、コクトオは前年11月に結成された日本ペンクラブに出席し挨拶をする<sup>7</sup>。同じく、この年、2・26事件の翌月、3月に結成されたばかりの東京詩人クラブが記念品を贈った<sup>8</sup>のもこの折りであろう。5月22日午後6時、お忍びのチャップリンたちとともに、コクトオは多くの文学者や報道班に見送られて、横浜からプレジデント・クーリッジ号でホノルルへ向かった。「日本は、詩人を尊敬することをまだ忘れずにある唯一の國のやうに思はれる。フランスでは、詩人はもの笑ひの種にされてゐる」<sup>9</sup>と語ったコクトオは、「一種新鮮な詩人らしい香氣をこの國の若い藝術家の間に残し風のやうに太平洋を渡り去つた」<sup>10</sup>のである。

ただし、2・26事件後の東京はなお戒嚴令下にあった。コクトオは見逃さない。

日本は、現在なほ戒嚴令下にあつて、青年士官達は、國粹主義の……官を擁立しようとして試みたりしてゐる。だからこそ、一方では僕の乗つた鹿島丸が呉れる宣傳パンフレットは、日本へ來れと、しきりに勧誘し、日本の春、日本の秋を、誘惑的な表紙に包んで、繰り返し繰り返し歌つてゐるかと思ふと、他方では、訊問だの、衛生検査だの、申告書だの、税金だの、寫眞機歿収の恐喝だの、警察官の横柄な態度だの、日本見物を厭にさせ、果ては自分で自分を怪人物ではないかと疑ふほど不安にしたりもするわけだ<sup>11</sup>。

コクトオがニューヨークを出港してパリに帰着したのが、6月17日である。ハリウッドへ戻ったチャップリンは、やがて『独裁者』の構想を練りはじめるであろう。

コクトオが世界一周を終えた頃、旅立つことになったのが島崎藤村であった。日本ペンクラブは、アルゼンチンの第14回国際大会に会長の島崎藤村と副会長の有島生馬を派遣することになったのである。7月8日、二人の歓送会を兼ねた臨時総会が開かれ、席上、芦田均の提唱で1940年度第18回大会を日本で開きたいという「東京招致案」が可決された<sup>12</sup>。藤村らは、7月16日、ブラジルへ移住する人々と一緒に、大阪商船のリオ・デ・ジャネイロ丸で神戸から香港へ向けて出港する<sup>13</sup>。東京市の戒厳令が解かれたのは二日後、18日のことであった。それはスペインで内乱が勃発した日でもあった。7月31日、国際オリンピック協会は1940年の東京大会を決定した。藤村たちは、8月1日から10日間にわたるベルリン・オリンピックのラジオ中継に熱狂する日本をよそに南下した。ケープタウンを經由し、サントスで移民たちを見送ったのち、9月3日、ブエノスアイレスに到着する。5日からはじまる大会は、冒頭から、スペインの抗争をめぐる紛糾した。

しかしながら、藤村たちは使命を担っていた。「きたる一九四〇年には日本建国二六〇〇年にあたり、東京においては「オリンピック」大会を初めその他各種の学術会議、また展覧会等も開かることであるから、同年国際ペン大会の会議地をも東京に定めたいとの各方面からの希望」<sup>14</sup>を果たすためであった。それはまた、文学者の連帯によって国際社会に進出する機会でもあった。最終日9月14日、東京開催の提案は承認された。

アルゼンチンの大会ののち、藤村はブラジルを訪問し、アメリカでルーズベルトが大統領に選出される経緯を知り、ついで大西洋を渡る。晩秋のパリに滞在して人民政府下の状況を観察した藤村は、榛名丸で帰途につき、スエズ運河を經由して、翌年1937年1月23日に神戸港に到着した。四ヶ月にわたる世界一周の旅を終えた彼は、鉄路で帰京する<sup>15</sup>。

帰国後、1937年2月の、日本ペンクラブへの報告によれば、「一方には国際聯盟からも退きながら、一方には文化的に手を握ろうとすることそれ自身す

でに困難があって、せつかく託されて来たことながら国際ペン大会を東京に開きたいとの件も、どうあろうかと案じられた」<sup>16</sup>が、有島が提案した東京招致案は承認されたのである。ただし、事はすんなり決定されたのではなかった。有島によれば、日本は国際連盟を脱退したものの、すでに満州国が成立しており問題はないと考えていたが、東京でのペン大会は「戦争の前にあるのか、後にあるのか」と、質問をあげせられ返答に窮したのであった。海外では、つぎに迫る中国での戦争がすでに予期されていたのである<sup>17</sup>。藤村たちの危惧は現実になった。廬溝橋で事変が勃発するのが、藤村が帰国した年、1937年の7月である。オーデンたちがこの大陸を訪れたのはそのためであった。彼らにとって、中国は、まさしく、第二のスペインであった。

オーデンたちが帰国する頃、1938年7月15日、政府は1940年に予定されていた東京オリンピックと皇紀二千六百年を記念する万国博覧会の計画を中止した<sup>18</sup>。他方、日本ペンクラブは、その前、6月26日から30日までブラハで開催された国際大会へ1940年東京開催の取消しを申し入れていたのである。

『英語青年』8月1日号「片々録」は「国際ペンクラブ東京大会中止」として記録した。

日本ペン倶楽部では皇紀二千六百年を記念して1940年の国際ペン聯合大会を東京に招請すべくアルゼンチンの第十四回大会で動議を提出して承認されてみたが、その後東亞の事情も一變、特に目下の時局からいつでもかゝる催しに多大の経費を支出することを避けたい意向の下に、このほど目下ブラグに開催中の国際ペン聯合大会席上へ、電報で東京大会希望取消しを申し送った。なほ本年度のブラグ大会に代表を派遣しない旨も同時に通告した。また來年度のニューヨークの大会には代表として野口米次郎氏を送ることに決した。<sup>19</sup>

皮肉なことに、この9月、ブラハならぬ中国の漢口へ向かったのが、内閣情報部から派遣された22名の「ペンの戦士」、いわゆる「ペン部隊」<sup>20</sup>であった。

「東亞の事情」が財政を圧迫していたとはいえ、同じ8月1日の『英語青

年』の「英學時評」に福原麟太郎が記すように、「PEN クラブが政治的になつたから、日本から代表を出すことを断つたといふ」ことも、中止の真相であった。福原はつづける。「この頃は、政治的でないものは無くなつたらしい」<sup>21</sup>と。すでに、前年11月の国際ペンクラブ理事会では、中国ペンクラブ本部の提案をうけて、議題に「支那における戦争」<sup>22</sup>をあげていたのである。これは見送られたが、しかし、この6月のブラハ大会では、新たに、前年12月の南京虐殺に関して日本弾劾の決議がなされようとしていた<sup>23</sup>のである。ほどなく『セルパン』10月号は「ペンクラブ第十六回国際大會報告」を掲載するが、その記事によれば「日本の空爆に対する反対についても、相當の反対意見があつた様子であるが、ここではこの部分を割愛せざるを得なかつた」<sup>24</sup>のである。「空爆」とは曖昧であるが、わが国では南京事件の実態が知られていなかったとしても、海外の新聞雑誌を購読しておれば、それが意味するものは想像に難くない。

ただし、「東亞の事情」とは政治的なものばかりではなかつた。『セルパン』8月号が東京大会中止について「文化ニユウズ」に伝えるように、「支那事變の發生と同時に、國內事情が戦時態勢化」<sup>25</sup>しており、「多大の經費を支出することを避けたい」ということも大きな理由であつた。この頃すでに、為替管理の強化によって人の移動はもちろん、新聞雑誌ですら統制下におかれていたのである。

『セルパン』同10月号の記事、「洋書の輸入制限」によれば、「為替管理と同時に、一般の非緊急品と同様、外国の書籍、雑誌の輸入が統制せられたことは、既に一般に知られてゐるところ」であつたが、「實際の輸入業者には為替の許可を與へてゐないので、事實上の禁止となつてゐる」<sup>26</sup>のであつた。「後記」に春山行夫が記すように、「政府は「愛國行進曲」によつて國民の志氣を勵ます」のはいいが、經濟政策が確立されぬまま、ガソリン統制、木綿の統制、つづいて紙の統制、と國民はひしひしと戦時態勢の緊張を身に感じはじめていたのである。彼はいう。統制はやむを得ないとしても、「文化・思想統制と經濟統制との限界を、能ふかぎり明瞭に區別して行くことが肝要であらうと思ふ」<sup>27</sup>と。

村野四郎は、同号の『セルパン』に、「一九三八年の田園詩」<sup>28</sup>を寄せた。

夕暮れ時、誰が弾くのであろうか、「畳の上でピアノが鳴る」。そして、

土の上に木椅子をだして  
 本日の夕刊を読む父親  
 資源の節約  
 錫鉛の使用統制いよいよ実施  
 薔薇の匂がしてゐる

事変勃発1年後、日常生活にも為替管理を強化せざるをえない情況と物不足がはじめていた。ピアノを新しく買うこともすでに贅沢であった。そして、中国や欧米の情勢を伝える記事がこの夕刊にあったとすれば、おそらくその多くは、同盟通信社を経由したものであったろう。そして、夕闇がせまる。

アンコンシラスな  
 農民たちの黄ろい灯が  
 こんなに美しく見えることはなく  
 住宅はアンテナの耳を出して  
 情勢をきいてゐます  
 夜の中から

「戸毎にラヂオ」を目標に放送局型受信機が制定されたのがこの年1月<sup>29</sup>であった。その普及によって、ラヂオ体操は「戸毎」に浸透するばかりか、詩の朗読を耳にする機会も多くなるであろう<sup>30</sup>。しかしながら、耳をそばだてるのは「情勢」であった。もちろん短波放送を受信することはできない。海外へのアンテナは彼方から届く新聞雑誌とならざるをえない。

丸善書店は、前年1937年12月号『セルパン』の「広告」に、恒例の「一九三八年度海外新聞雑誌豫約期」を告げていた。「わが文化陣・産業陣も名パイロット 海外新聞雑誌を得て果敢な渡洋爆撃はじめて可能!!」<sup>31</sup>と。他方、研究社は英語の新聞雑誌を読むための辞書『時事英語辞典』を5月に発行したが、同社は、『セルパン』同12月号の広告に、「忽十二版」と告げた。

これは「生きた英語 即ち政治・経済は云ふに及ばず、科学・スポーツ・映画・洋裁及び満支の地名人名に至る迄凡そ時事英語と名づけられる總ゆる語を博聚して解明せる日本最初の辞典」であり、「果然、發兌以來高専學生を初めとして全知識階級に競ひ迎へられてゐる」のであった。「何故か？本辞典には特に支那滿州國の地名人名が豊富に収められた上、發音を示し且つ百科辭典の説明が加へられてゐるから」<sup>32</sup>であった。國際連盟を脱退して以降、すでに時事英語の強化が要請され、研究社の月刊誌『英語研究』の編輯方針にも反映されていた<sup>33</sup>が、日支事変以降、あらためて、盛んに主張されたのである<sup>34</sup>。

だが、その新聞雑誌は為替統制のもとで「事實上の禁止となつてゐる」のであった。海外からの新聞雑誌の涸渴の情況は、従前から學生を対象にして時事的読み物を掲載する「カレント」として親しまれた「英文綜合文化雑誌」、*The Current of the World* にも影響を与えた。同誌は『セルパン』4月号から、「世界時潮を把握せよ！」と広告を掲載しはじめた。「**歐洲の火薬庫 オーストリアに火薬は點ぜられた**」のであり、「**事變勃發以來日本の行動が世界言論海に投じつつある一石の波紋は餘りにも深刻である**」からだ。この情勢にあつて、同誌は「歐米の著名の雑誌新聞數十種より知識人必讀の主要記事を選び譯註し或いは翻譯して紹介する」ものであり、「本書を読めば世界の最も新しき思想、政治、經濟、外交、科學等々の新論説を生のみゝ歪められずに知る事が出來ると同時に動もすれば薄弱ならんとする語學力を保持出來る」のである。この「カレント誌は既に知識人の愛讀書」<sup>35</sup>であった。同誌は英語雑誌の範疇を越え「知識人」にも必須のものとなるうとしていたのである。そして、7月号の「広告」以降、8月号そして9月号に謳うように、「外國新聞雑誌の飢饉時代に知識階級の渴を醫するものは獨り カレント」<sup>36</sup>であった。『セルパン』10月号の「広告」はいう。

最近為替管理の關係上外國新聞雑誌の輸入に未曾有の制限を受け一般には殆ど入らなくなつたといふ事情が拍車をかけたる為め、英米は元より獨佛支露諸國の主要新聞雑誌より重要ア－ティクルズをピックアツプし解説附註して最も急速に紹介するカレント誌の需要は各方面に高まり

つゝあります<sup>37</sup>。

他方、翻訳あるいは抄訳によって海外の情報を伝えていたのが、学生、知識人を念頭にして編輯されていた「文化綜合雑誌」、『セルパン』であった。この年、1938年11月、文部省教学局は大規模な学生生活の調査を実施した。その「平素閱讀せる雑誌」のみについて、しかも、鮎川に関係が深い学校にかぎって見れば、『セルパン』の読者は、私立四大学校、早稲田・慶應・立教・立正の総数909名のなかで11名で第6位、また、同四大学の予科生総数800名のなかで15名、第10位<sup>38</sup>である。編輯長春山もいうように、その調査方法が必ずしも實際を反映するとはいえない<sup>39</sup>が、いずれも上位に『中央公論』『改造』『文藝春秋』の三誌が圧倒的な数字を占めていることを配慮すれば、健闘を讃えるべきであろう。早稲田の予科にいた鮎川が調査の数字に反映されているかどうか不明である。だが、まちががなく、彼は『セルパン』の読者であった。この雑誌は『カレント』と同じように、その広告文の文言を借りるなら、「英米は元より獨佛支露諸國の主要新聞雑誌」からえられた情報売り物としていたのである。

そして、海外の詩の動向を伝えるのが『新領土』であった。『英語青年』9月1日号の「英學時評」に、福原が「元來、詩の雑誌であらうが、いつも半分以上、殆ど常に英國の新しい文學思潮を翻譯して紹介してゐる。詩論の翻譯などかなり早く載る。新しい批評家達、Michael Roberts、Louis Macneice、Auden などの論がよく出てゐる」<sup>40</sup>のであった。そして、この年1938年の『新領土』は順調であった。

オーデンにかぎっていえば、彼がマルセイユから香港へ向かう直前、1月15日の週刊誌に登場した最新作は、『新領土』5月号の「雜詠歌」<sup>41</sup>となった。7月号には近藤・結城共訳「W・H・オーデン」があった。ハアバアト・リイド、セシル・デイ・ルイス、スティヴン・スペンダア、そして、ルイス・マクニイスのコメントを集めたこの記事は、前年11月の『ニュー・ヴァース』<sup>42</sup>に拠ったもので、本国でのオーデンへの関心の広がりやをすばやく反映したものであった。

しかしながら、『新領土』には時差があった。その顕著なものが、9月号の、



外山定男訳エドモンド・ウイilsonの「オーデン論」<sup>43</sup>である。これはオーデンたちの政治姿勢に不満を述べたものである。ただし、この出典はその末尾に附記されているように、1937年2月24日のアメリカの週刊誌『ニュー・リパブリック』であった。その間、二年以上の時差がある。しかも、この原稿を書きあげたウイilsonが付記しているように、このときすでに、そのオーデンは「スペインで傷病兵の輸送車の運転をしており」、さらに、そのスペインからの第一報「ヴァレンシアの印象 (Impression of Valencia)」は、すでに前月、イギリスの『ニュー・ステイツマン・アンド・ネイション』1月30日号に掲載されていたのである。アメリカに住むウイilsonはイギリスから到着した週刊誌でこれを読み、よく書けていると評価する<sup>44</sup>。オーデンはかつての観念的な政治姿勢から脱却し、行動をはじめたのである。その産物が「スペイン」となる。『新領土』9月号のウイilsonのオーデンへの不満は、「スペイン」の詩人に向けられたものではなかったのである。

だが、この年、1938年、オーデンたちは中国に来ていた。しかも、彼らの動向は、スペインの場合とちがって、最小限の時間差でとらえられたのである。

9月1日号の『英語青年』に『新領土』を紹介した福原は、同じ「英學時評」に、つづいて、オーデンとイシャーウッドの書き物を紹介している。

*The New Republic* の六月一日號と *The New Statesman & Nation* の六月二十五日號に Auden と Isherwood の支那戰線日記が出てゐる。支那兵が、英國にお禮をいふことや、日本は兵器で戦ふが、支那は spirit で戦ふのですと語ることや、どちらにも書いてあるが、彼等自身は、ははあ左様ですかと言つてゐるやうに極めて無關心で、唯戦場の冒険を楽しんでゐるらしい<sup>45</sup>。

『英語青年』は発行日の5日ほど以前に店頭に並んでいたから、執筆されたのは遅くとも8月初旬のことである。その福原の手許にあったのは、二人が中国にあった頃、6月1日付のニューヨークの週刊誌『ニュー・リパブリック』、そして、ヴァンクーバーへ移動中の6月25日付ロンドン発の週刊誌『ニ

『ニュー・ステイツマン・アンド・ネイション』がそれぞれあった。二つの週刊誌は順調に到着していた。福原が「どちらにも書いてある」と記したように、二つの記事はそれぞれ、“Chinese Diary”と“The War in China”と題されているが、二つは元来同じテキストであった<sup>46</sup>。

福原の手許にあった6月25日号につづいて、7月16日号の『ニュー・ステイツマン・アンド・ネイション』は、福原のいう、イシャーウッドの「支那戦線日記」<sup>47</sup>をつづけた。その間、7月2日号には、オーデンの詩、“Chinese Soldier”<sup>48</sup>が挟まれていた。

福原がオーデンたちの日記を「極めて無関心で、唯戦場の冒険を楽しんでゐるらしい」と記したように、福原自らも無関心であるかのようである。だが、『セルパン』も『新領土』も、これら一連の記事と作品を正面から受けとめたのである。誌面の特色をルポルタージュにおく春山にとっては、外国人の眼から中国の現状を伝える恰好の記事であった。そして、それがニューカントリー派の詩人たちのものであるだけになおさらであった。『新領土』にとっては、ことさら、そうであったのだ。オーデンの詩は、ほどなく、名切哲夫訳「支那にて」として、翌年、1939年1月号の『新領土』に登場<sup>49</sup>するであろう。

『セルパン』は時を移さず、イシャーウッドの二つの記事を9月号と10月号に掲載した。それぞれ、「特輯 現地報告」欄の「漢口前線」と、「隴海線（鄭州 西安）前線」<sup>50</sup>である。

8月20日発売直後、22日の日記に鮎川は「『セルパン』九月号に、近藤東が詩を書いてゐる。題して田園。軽快。柔らかなスリルがある」と記している。彼は、その9月号の「漢口前線」の前書きを眼にとめたはずだ。

\* 最近イギリスの新文學のチャンピオンたるW・H・オーデンと、劇作家クリストフア・アイシャウッドが、漢口に來てゐることが傳へられ、その現地報告がはじめて發表せられた。（オーデンは短い詩を發表してゐる。）

\* オーデンは昨年スペインを題材とした詩によりイギリスの王室金牌詩賞を受けた新人であり、アイシャウッドとの共著になる『犬になつた男』

は十二年一月號の本誌にテーマ小説<sup>51</sup>として紹介した。この二人の文學者は、恐らく近く日本にも立寄ると思はれる。その先觸れとして、ここにその筆になる現地報告を紹介したい<sup>52</sup>。

編輯長春山の文章であろう。「王室金牌詩賞」の対象となったのは「スペイン」ではない<sup>53</sup>が、その注目のオーデンたちが近く日本にも立ち寄るといふのだ。

イシャーウッドの「漢口前線」はこのようにはじまる。

ジャーナリストと云ふよりも、現在歴史が作られてゐる地點にあることを好む人の見方からすれば、現在の漢口は、世界で最も興味ある場所の一つである。支那のバルセロナとも云へる。蒋介石が重慶へ移つた今、政府所在地ではないし、また支那軍に供給する兵器彈藥の陸揚場である廣東の如く、戦略的な重要性をもつてゐる譯でもないが、支那軍がいかにか戦つてゐるかを見、また今次事變の指導的な立場にある男女に會はうとするならば、どうしてもこの漢口へ来てみなければならぬ<sup>54</sup>。

このとき、「支那のバルセロナ」たる漢口に対する作戦はすでに開始されていた。やがて、9月11日、ペン部隊の第一陣が東京駅を出発するが、向かうところは漢口であった<sup>55</sup>。およそ二ヶ月遅れの情報だが、はからずも時宜に適った記事であった。

10月号の「隴海線（鄭州 西安）前線」は、その前書きにいうように、ロンドンから「近着の」7月16日号の週刊誌に「発見」<sup>56</sup>されたものであった。

日本は現に戦争の當事國なるが故に、本文に見る如き傍觀者的態度をとることは不可能であらうと思はれるが、しかしこの現地報告から發散する藝術家としてのイシャーウッドの感受性には、現地報告文學として、幾多の興味ある面が示されてゐることを見逃しがたい<sup>57</sup>。

連作「亞細亞」に日支事變の影を投影しようとしていた鮎川にとって、現地

からの報告はとりわけ関心をよんだであろう。アジアはスペインよりも身近な、しかも、切実な問題であったのだ。

ただし、8月20日発売の『セルパン』9月号が「恐らく近く日本にも立寄ると思はれる」と記したとき、「新文學のチャンピオン」たる「二人の文學者」は、旅行者として立ち寄り、この地の詩人たちに会うこともなく通過し、すでに帰国していたのである。しかも、中国滞在中に書かれた「隴海線（鄭州西安）前線」の原稿はロンドンに渡り、掲載されたのがオーデンたちがロンドンに戻る前日であった。そして、それがふたたびロンドンから発送され、シベリア鉄道を経由して、春山の手許に「近着」となったのである。

たしかに「二人の文學者」は日本に立ち寄った。長崎港はイシャーウッドにうら寂れたスカンジナビアの入り江を思わせた。神戸でオーデンが目撃したのは、商店には光はあったが空襲に備えるとして街灯が消えていることであり、東京駅で衝撃を受けたのは、人々の喚声と幟に見送られて中国の戦地へ向かう出陣列車の出発の光景であった<sup>58</sup>。オーデンが驚いて眼鏡を落とし壊れたとイシャーウッドは記録しているが、見送る人々に揉まれたためであったかも知れない。この頃は停車場司令官の下に出征軍隊の歓送は統制<sup>59</sup>されていたとはいえ、混乱状態にあったことは想像できるのである。東京駅で彼らが目撃した列車の兵隊は漢口へ向かおうとしていたのかも知れない。イシャーウッドの記憶に残るのは、車窓から見た夕日の富士であり、翌朝、ホテルのロビーで目撃した日本人将校とナチス将校がたがいに手をかざして挨拶しつつお辞儀する珍妙な光景であり、そのとき、はじめて体験した地震であった<sup>60</sup>。彼らはこの日6月18日午後、*Empress of Asia* で横浜から出港したのである。帰途、ニューヨーク滞在中に、オーデンとイシャーウッドはアメリカ定住を決意したとされる<sup>61</sup>。

その秋、ヒットラーのチェコの領地分割要求をめぐって、ヨーロッパはミュンヘン危機に遭遇した。英国は戦争に備えた。9月27日のチェンバレンの融和策で収まりをみせたが、「不安の時代」は深まった。オーデンは中国旅行について講演をつづけた。しかし、彼は「ファシストと戦う中国というテーマに辟易」していた。二人のアメリカへの旅の準備が進められた<sup>62</sup>。

10月25日、日本軍は「支那のバルセロナ」たる漢口に突入した。27日、政

府は漢口・武昌・漢陽、すなわち武漢三鎮を完全に攻略したと公表した。東京詩人クラブ主催で「戦争詩の夕」が開催されたのが、前日26日である。衣巻省三が記したように、武漢三鎮はすでに「占領したも同然」であり、「文藝汎論後援、東京詩人倶楽部主催、軍部のお骨折りに依つた」この詩の夕は「時節柄眞に意義の深いもの」<sup>63</sup>となったのである。この夕べに居合わせた18歳の鮎川にとっては忘れることがのできぬ夜となった。村野のこぼれ話を借りれば、詩人たちは「純粹派」から一挙に「人生派」に転じたのである<sup>64</sup>。

オーデンの詩と彼が撮影した写真、そして、イシャーウッドの日記形式のルポルタージュからなる、中国旅行記が纏められたのはこの頃である。12月末にその原稿を出版社にあずけた二人は、翌年1939年1月17日、サザンプトンから出港した。香港に向けてマルセイユから船出して一年後のことである。

## 21. 旅の方法

1939年1月1日号『英語青年』に、成田成壽は「秋以來英米文壇は色とりどりの出版物で賑つてゐるが、特に嘗て並んで文壇に出た Stephen Spender, W. H. Auden, C. Day Lewis の活動がやはり目ざましい」と書いた。しかし、これらの出版物を手にするには難しくなっていたばかりか、その間に、「目ざましい」活動をしていた詩人たちの一角は崩れていた<sup>65</sup>のである。

オーデンたちが大雪のニューヨークに到着したのが、1月26日の朝である。昼のニュースで、バルセロナがフランコ軍のもとに陥落したことを知る<sup>66</sup>。そしてW・B・イェイツが没したことを知るのは三日後<sup>67</sup>のことである。3月、*Journey to a War* すなわち『戦争への旅』がイギリスで刊行された。アメリカ版は遅れて、8月初旬の刊行となった。

1月号の「支那にて」を皮切りに、1939年の『新領土』はオーデンをつぎつぎに紹介した。6月号の『荒地』第二部につづく、7月号の「スペイン」を見逃すことはできない。9月号にはスペンダアの「オーデンの重要性」が掲載された。そして、同号から奈切哲夫訳「オーデン詩抄」が連載されることになる。

『セルパン』もまた、緊迫するヨーロッパ情勢を紹介しつつも、オーデンたちの動向を追っていた。9月号「支那現地報告編輯」欄の足立重抄訳、ク

リストファ・イシャウツド「支那戦線報告」<sup>68</sup>である。これは、イギリス版 *Journey to a War* をもとにしたものであり、オーデンが撮影した写真も転載された。

その前書きは明らかに春山のものである。

\* クリストファ・イシャウツドの支那現地報告は英米の雑誌に断片的に発表されたものを既に二回に亙り（昨年九・十月号参照）本誌上に紹介したが、本年春その全収穫が纏められて『戦争への旅』と題して上梓された。

\* 支那事變に際して各国から多数のジャーナリストが東洋に派遣され、数多くの現地報告を書いたが、純粹の文學者の手になつたものは、現在のところこの一冊だけ位であらうと思ふ<sup>69</sup>。

この『セルパン』9月号が8月20日に読者の手に渡った直後、独ソ不可侵条約が結ばれ、9月1日、ドイツはポーランドに侵入し、それを受けて3日、英仏はドイツに宣戦を布告したのであった。国際ペンクラブ年次大会は前年のニューヨークにひきつづき、この9月4日から7日までストックホルムで開催されることになっていたが、直前に、流会となった<sup>70</sup>。

『新領土』11月号のために『戦争への旅』への紹介を予定<sup>71</sup>していた春山が、日本雑誌記者団満州国調査隊の一員として旅立つことになったのが、奇しくも「戦争詩の夕」から一年後、10月26日であった。彼は急な出発を控えながらバルダックスを借りて<sup>72</sup>写真の練習をし、様々な資料を集めて読んだが、文學者のルポルタージュたる「オーデン&イシャウツドの支那紀行」<sup>73</sup>が念頭にあったことは否めない。

春山のルポルタージュの方法は、眼で見ることであった。彼の「満州國の印象」によれば旅行記は、

古來から素通りの印象、眼による知覺のたのしみを以て生命とする。  
グリンプス  
 瞥見であり、今日の流行語でいへばスナップの角度である。我々が瞬間に消え去つてしまふニュース・リールで、満州國や北支の風物に接す

る喜び、それがいはば旅行者のたのしみ、旅行記を書く喜びに通じる<sup>74</sup>。

しかも、この「眼による知覚のたのしみ」は、アリストテレスによって保障されていた。

「蓋し、人は實利とは関係なく、知覚を知覚そのものとして愛する。しかして殊に眼に依る知覚を愛する。なにごとかをなさんとする時ばかりでなく、なにごとをなすつもりのない時でも、我々はなににもまして見んことを願ふ。その理由は、視覚が我々に他の如何なる感覺よりも多くを知らしめ、また事物の種々相を明らかにするからである」<sup>75</sup>とアリストテレスは『メタフジカ』の冒頭で述べてある。私は旅行記の文學としての價值の一つをここに見る<sup>76</sup>。

ただし、「スナップの角度」はそれだけに留まらない。

旅行記はいはばデテイルの興味である。それはまた見られた対象の量的な、外在性の面白さであると同時に、見る側の人間の持つてある角度の質的な、内在的な面白さをも意味する<sup>77</sup>。

この方法は、旅の発端から発揮された。車内で配られたパンフレット「開拓地の生活より」に記された自然と風土の記述をたどりながら、春山の気持ちははやる。

時は十月の終り、満州はもはや枯草の大海原であらう。そこにどのやうな詩がかくされてあるか。私の空想は列車の速度をオーバーラップして北方にかける。

オーデンたちと方向を違えて下関に向かう急行列車は、名古屋あたりから夜になる。伊吹山は見えない。春山の印象はこのように記録される。

京都では三色の航空標識燈だけが、メカニツクに光線を反射してみた。京都、神戸間では寝臺のなかの電燈が消された。高架線で通過した神戸は、白色の立體を積み重ねた化石の都市であつた。夜半に月が出た。

この夜も「本土全體にわたる防空演習」であつたのだ。翌朝、下関に近づく和稲の稲が早害のために立ち枯れとなつていた。「鳥も人影も見えない凶作地帯の風景」であつた<sup>78</sup>。

このスナップの角度によるルポルターージュの方法は、対象と、それを見る関係から成り立つ。のちに纏められる『満州風物誌』はこの見事な成果である。

しかしながら、スナップ写真がそうであるように、対象とそれを見る関係は、まさに、シャッターを切る瞬間、その時間において共有される。他方、鮎川の9月4日付「雑音の形態」は、まったく異質な時間を示しているのだ。

白い事務所の内側の時計の速度は  
意識の外部と呼ぶ空壇の堆積した世界よりも  
二十分も早いことに不思議はない<sup>79</sup>

時計と意識の速度が一致しないかぎり、世界は形態を失い、ものの集積と化し「空壇の堆積した世界」となる。そこにあるのは無秩序な雑音でしかない。春山の「スナップの角度」を、さまざまな細部の衝突を愉しむモダニスト詩人の方法として敷衍すれば、鮎川はその方法からすでに距離をおいていたのである。

鮎川の「近代詩人」は、12月の『LE BAL』第21輯に掲載された。

近代に於ける即物性といふ魅力ある言葉にこだはり、それらを殊更過大視することは、結局死んだやうな客觀の世界から眺めたところの硬直せる物質の堆積や、事物の角度のみを尊重せしめ、荒れ果てた固形の地域にフレキシビリティの素因となるエスプリの輝きを消滅せしめると



き、石くれの如き言葉の残骸があるのみである。といふ意味は何も直接にメタフィジクの必要を説くことでもなんでもないが、あまり没批判的な近代性の追求は往々つまらぬ脇道へと眼も見えない薄暗がりのまま續いてゐることがある<sup>80</sup>。

春山の「印象」の魅力は、対象とそれを見る関係が生きいきとした「エスプリの輝き」によって支えられているからである。しかし、その輝きが「消滅」するならば、ことばの残骸となるであろう。もちろん、鮎川の念頭にあったのは春山ではない。春山は見ることに徹していたのである。見るためには、対象を見つめるための気力が必要であろう。おそるべき、体力である。それは、編輯者として締切と戦う体力にもいえるであろう。ただし、それが失われるならば、「眼も見えない薄暗」の内部が露呈するであろう。鮎川のモダニズムへの疑いは、まさしく、ここにあった。そして「空壇の堆積した世界」を克服する方法は、それをいわば形而上の視点から再構成することであった。

『LE BAL』同号の「後記」欄に、中桐雅夫は、「鮎川はアリストテレスのメタフュジカを讀んでゐるが、何の準備であらう」<sup>81</sup>と記した。それは、春山も傍らに置いていた、同じ『世界大思想全集』の岩崎勤訳に他ならない。鮎川は、春山とまったく異なるところを注視していたのだ。

アリストテレスは「凡て人は生れながらにして知らんことを欲する。その一つの證據は感官知覺に於ける喜びである」とはじめていた。「視覺が吾々我々に他の如何なる感覺よりも多くを知らしめ、またよく事物の種々相を明らかにする」のである。しかし、春山は、つづくアリストテレスの立場を切り捨てていたのである。

尚ほ吾々はまた、如何なる感覺をも智慧とは看做さない。然かも實際に於て、感覺は個々物の最も確實なる知識を與へるものである。けれども、彼等は何事に就ても何故と云ふことを語らない<sup>82</sup>。

感覺は知識を与える。だが、感覺から得られた確實な知識といえども、「知らんことを欲する」ために不可欠な「何故」という問いかけはそこから生ま

れない。

同じ『メタフュジカ』を読みながら、やがて、鮎川は1940年3月7日付、「文學の攝理」<sup>83</sup>を書く。その一節である。

大體現代には一般に知るといふ働きが缺けてゐるやうに思う。或は現代の知そのものに、どこかしら缺けたところがあるのである[。]「すべての人は生れながらにして知らんことを欲する」これは周知の如く、アリストテレスの「メタフュジカ」の最初に出てくる言葉である。ただ人生に於ける平凡な眞理であるに過ぎない。しかし現代人の偏頗な知的活動なるものは、かかる平凡な眞理をさへ裏切るものである。勿論ここで知るということは單に經驗や知識のみを指すのではないことは自明である、知るといふ働きの缺乏してゐる重大な原因は、現代の特種な社會的理由に基づくものであるかもしれない。けれどももつと重大な病根と思はれるものは、さういふ外的世界の混亂が、直接個人の内的世界の混亂となりその中に捲き込まれてしまつて、現象の廻轉するベルトに従つて自己の人間性も擦り減らしてしまつてゐるといふ事實である。現象の變化が特別甚だしく、生きてゆくためにはどうしてもそれに適應してゆかねばならぬといふ本能的な反應作用に従つてゐるのかも知れない<sup>84</sup>。

鮎川は無理をしている。彼は、「知らんことを欲する」人間の働きを妨げる「重大な原因」として「現代の特種な社會的理由」をあげつつ、「もつと重大な病根」は「内的世界の混亂」にある、とする。だが、逆である。その「内的世界の混亂」は「外的世界の混亂」のゆえに生じたのであり、その原因は「現代の特種な社會的理由」にあるからだ。それでもなお、「知らんことを欲する」ためには、内的世界のみならず、同時に、それをもたらした「現代の特種な社會的理由」を問わねばならぬであろう。それは、すでに問うことを許されぬものであった。森川義信が唄ったように、「季節はすでに終わりであつた」。

上の段落は、つぎのように結ばれる。

どうにも仕方のないことであるとも云へよう。ただ現実と自己との相剋に悩む者こそ不幸である。単なる一時的便法や便宜主義でのどかに生活してゐられないものの將來には、如何なるかたちで呪はれたものが待ち受けてゐるのか<sup>85</sup>。

「文學の摂理」を掲載した『荒地』第5輯は1940年5月に刊行された。同号の、鮎川たちの翻訳「荒地・第五部 雷の言つたこと」は森川に捧げられた。そして、郷里から送られて掲載された森川の作品が「眠り」であった。これは、遅くとも2月21日以前に鮎川のもとに届いていた。鮎川が「文學の摂理」を書いていた頃<sup>86</sup>である。

骨を折る音

その音のなかに

流れる水は乾き

鶯色の風はおちて

石に濡れた額は傾くままに眠つた

みえない推移の重さに

骨を折る音

その音のなかに<sup>87</sup>

わたしたちは、ただ、居住まいを正すだけである。

「現象の廻轉するベルト」あるいは「みえない推移の重さ」のもとで「何故」という問いかけが禁じられている以上、「生れながらにして知らんことを欲する」願いは果たされえない。そしてまた、「感官知覺に於ける喜び」を享受できぬかぎり、「呪はれたものが待ち受けてゐる」ばかりである。

形而上へいたる道をふさがれた鮎川に残されたのは、対象とそれを見る眼の相互作用から生まれる「形相」であった。アリストテレスにとって「形相」は存在そのものではない。しかし、鮎川にはそれがすべてであった。かくして、彼の「形相」と題する一連の作品が生まれる。最初の「形相」<sup>88</sup>は、

1940年1月30日付である。

一本の莖は清浄な水を欲する  
 だが白いものは  
 いまおびたしい影のなかでもがく  
 上品な耳のうしろで  
 怪奇な囁き  
 そして眞珠のやうににりながら  
 寒い廊下をわたつてきた  
 光澤とともに  
 盲目はドアの隙間から入ってくる  
 眼はくらみ  
 殺氣だけが嵐の如く起ち上がり  
 一個の器物と共にすべてが放擲された  
 歪みや  
 空虚な核が  
 小さな宇宙の平面に残された<sup>89</sup>

エリオットの読者ならこれが『荒地』第二部にもとづいたものであることに直ちに気づかれるであろう。しかし、それで終わるのではない。「白いもの」は「怪奇な囁き」となり、また、「眞珠」となり、さらにまた「光澤」を放つもの、また、「殺氣」を呼ぶものとなって、平面を「歪みや／空虚」で覆うのである。ものは、実態をもたぬ「形相」の断片となって室内に充満するのだ。

あのひびきは何か  
 あれは日没とともに  
 おまへをとりまく五つのドアである<sup>90</sup>

この頃の情勢について、のちに鮎川は記す。

ヨーロッパでは、すでに戦争が始まっていた。この年の八月二十三日に独ソ不可侵条約を結んだヒットラーの軍隊は、九月一日にポーランドへの進撃を開始し、イギリスとフランスが対独宣戦を布告したと思う間もなく、九月十七日にはソ連軍がポーランドに進駐、翌日には早くも独ソ間でポーランド分割協定が成立するという異常なテンポで、第二次大戦の戦火は欧州の全土に拡がりつつあった。

敗北に終わったノモンハン事件を、やっと停戦協定にこぎつけたばかりの日本の政府は、欧州戦争不介入を宣言し、支那事変解決に邁進すると声明していたが、すでに一年ほど前から防空演習を実施したり、出版統制強化の方針を決めたり、共産主義グループの検挙につづいて自由主義的図書、言論の取締りを強めたりして、戦時体制への準備おさおさ怠りないという情勢にあった。女子のパーマメントは禁止され、石油は配給制となり、映画、演劇、音楽なども、ますますきびしく統制されるようになっていた<sup>91</sup>。

8月号『セルパン』に特輯「我が闘争」を掲載し、10月末の防空演習の日に満州へ旅立った春山も、また、「倒れるおととノ踏みにぎる音」<sup>92</sup>を聞きながら年末に『體操詩集』を刊行する村野も、そして、森川も鮎川も、ひとしく、この「現象の廻轉するベルト」に動かされていたのである。

一点、鮎川の記述に欠けている事項は、海外からの新聞雑誌と書籍の飢饉である。

オーデンたちの消息はとぎれがちであったが、「オーデンとイシャウツドがニューヨクに移住したといふ報道」のひとつが、すでに見たように、春山の旅行中にロンドンから到着した『ニュー・ステイツマン・アンド・ネイション』10月7日号、Cyril Connollyの“The Ivory Shelter”であった。そして、アメリカの『タイム』10月30日号の新刊紹介欄の無署名記事、“Noonday & Night”<sup>93</sup>もまた、そのひとつである。ニューヨーク発の最新の情報であった。この記事は、春山の「戦争への旅行」の紹介記事とともに、『新領土』1940年2月号の、近藤東訳「大戦下の英・米・佛」となった。

『タイム』は、オーデンたちの<亡命> (“exile”) を伝えていたのである。オーデンが「ブルツクリンに居を持ち定住することにした」のは「先週」のことである<sup>94</sup>。

オーデンは、ある記者に語ったという。

彼はこのヨオロッパの<混濁>から一つの希望的な見透し 即ち、暴力的革新は暴力的戦争と同じくイムポテントであるといふ全般的具現を見たといふ。彼は『アメリカではナショナリズムなどいふものは何も意味しない。そこには人間があるのみである。そこにこそ未来がかくあるべきであるといふものがある』といふ。

Auden told a reporter that he saw one hopeful prospect from the “muddle” in Europe; a general realization that violent revolution is an impotent as violent war. Said he: “In America nationalism doesn’t mean anything; there are only human beings. That’s how the future must be. . . .”

同じアメリカの『ニュー・リパブリック』10月18日号 “September: 1939” から、ほぼ20日後の記事である。オーデンのアメリカ定住の決意は、この作品の発表とほぼ同時に公となっていたのである。「暴力的革新」が「暴力的戦争」の前に挫折したヨーロッパを離れたオーデンにとって、アメリカは、ナショナリズムとは無縁の未来の国、彼の新領土となったのだ。

近藤訳「大戦下の英・米・佛」はさらに、イシャーウッドがハリウッドで台本を書く仕事を始めたことを伝えた。また、コクトオはココ・シャネル (Couturière Gabrielle Chanel) に招かれてロンドンへ渡り、リッツホテルでこう語ったという。

『私は、この荘重な戦争の間、官の位置を持たぬ作家の義務は、彼自身を一個のゼロの形にまで秩序づけるか、フランスの指にかの指輪をはめるかである。』<sup>95</sup>

“I consider that during a war of this gravity the duty of a writer who has no official post is to make himself until further orders into the form of a zero and to pass that ring over the finger of France. . . .”<sup>96</sup>

何かの要請あるいは命令があるまで、一市民たる詩人は自らをゼロと化し、そのゼロをもって指輪となり、シャネルと同じように美に献身するしかないのである。ただし、かつてコクトオが来日のおりに語ったように「フランスでは、詩人はもの笑ひの種にされてゐる」とすれば、祖国のために何かの命令を受けることはないであろう。

森川義信はこの年12月、予科を中退して帰郷した。東京駅を出発した車中の、そして、船中、さらに香川に向かう列車のなかの、彼の思いはどこにも記録されていない。

## 22. 1940年1月の「一九三九年・九月」

偶然とはいえ、『新領土』の創刊がオーデンの“Spain”が登場した同じ1937年5月であったことは象徴的である。以降の『新領土』は彼らニューカントリー派に沿いながら営まれたといえる。しかし、明日のための「闘争」を呼びかける「スペイン」が翻訳されて1939年7月号に登場したとき、すでに人民戦線は敗北し闘争は終わっていた。

『セルパン』もまた、スペイン内乱における人民戦線の動き、そしてさまざまな作家会議の動向を執拗に追っていた。だが、『セルパン』は日支事変、さらに、新たなヨーロッパの大戦に関わらざるをえない。小島輝正は、1939年8月号特輯のアドルフ・ヒットラー「我が闘争」をもって『セルパン』のエポック<sup>97</sup>とする。

『新領土』についても、W・H・オーデン「一九三九年・九月」を掲載した1940年1月号が、その分岐点といえるであろう。それは海外からの情報が涸渇するなかで発見された作品であるばかりか、衰えつつあった『新領土』の最後の輝きであった。奈切哲夫訳「オーデン詩抄」は、スペンダー「W・H・オーデンの重要性」を掲載した9月号からつづいて10月号の2回、そして12月号に再開されたが、ふたたび中断される。オーデンの新作が割りこむこ

とになったのである。『ニュー・リパブリック』の表題“September: 1939”は、タイプ原稿<sup>98</sup>の表題、“September I 1939”の印刷ミスであった。ただし、『新領土』は、活字にされたテキストにもとづいて、「:」を「・」としたのである。

『新領土』1940年1月号、阿比留信訳「一九三九年・九月」<sup>99</sup>の冒頭である。

私は五十二番街の  
曖昧屋の一軒のうちに腰を下してゐる  
如才ない希望等も息絶える時  
この低調と不信の十年間に  
頼りなさと危惧の念を抱いて

曖昧屋よりもむしろ安酒場のほうがいいだろうが、詩人はそこで、スペイン戦争の敗北、ついで、戦争の勃発にいたった、30年代を顧みるのである。

怒りと恐怖の波は  
地球上の華麗なしかも暗黒と化した  
國土等一圓を覆ひ  
我々の日々の生活を悩ます  
そこはかたない死の臭ひは  
この九月の夜を不機嫌にしてゐる。

「一人の精神病患者を神たらしめた」ドイツにたいして取りうる方策はなかった。それは、デモクラシーの弱さであった。

亡命者ツキジデスは知つてゐた、  
デモクラシー  
民主主義について  
言論の言ひ得る總べてを、  
また獨裁者等は何をなすかを、  
一つの冷い墓石に向つて



彼等の語る老おいのごたくを

それら總べては彼の著書の中で分析されてゐるのだ、

オーデンはそれを知りながら、しかし、「それら總べてを再び我々は堪へ忍ばねばならぬ」と歌う。

アメリカ、そのニューヨークの「局外中立の空」の下にそびえ立つ「摩天樓等」は「集合人間の強さを / 布告」している。デモクラシーの国アメリカはヨーロッパの情況に関与せず、中立を守っている。

だが、誰がその語調のよい夢の中に  
何時までもゐることが出来よう、  
彼等の見つめてゐる鏡からは  
彼の顔と  
そして國際的な不正。

But who can live for long  
In an euphoric dream?  
Out of the mirror they stare,  
Imperialism's face  
And the international wrong.

対照してみれば、訳者あるいは編輯者の配慮による不可解な詩行の意味は明らかになる。アメリカの市民の背後にも、「國際的な不正」だけでなく、「帝國主義の顔」が忍びよっているのだ。

詩人は周囲をながめる。

酒場に沿つた顔には  
彼等の平常の日を守り続ける  
明りは消されてはならない、  
音楽は絶え間なく奏されねばならぬ

「善良」な人々の「幸福」な日常は、守られねばならない。しかしながら、詩人はその日常の背後にある「國際的な不正」を警告し、訴えるのだ。

私の有つてゐるものは唯ひとつ  
 折り摺まれた嘘を解きほぐすひとつの聲だけだ、  
 街の人間の官能的な  
 頭腦の中に巣くふロマンテイクな嘘、  
 彼等の嘘  
 彼等の建物は徒らに空を手搜りしてゐるのだ  
     と云ふそのやうなものはありはしない  
 だからと云つて誰もひとりで生きてゐるのではない  
 飢餓は市民とか警察官とかの  
 選り好みなく襲ふのだ、  
 我々は互に愛し合はねばならぬ、でなければ死ぬよりほかにはない。

「彼等の嘘」と「 」は、それぞれ、“The lie of Authority”であり“the State”である。しかも、オーデンはこれらを大文字で記していたのだ。人を惑わすのは「当局の嘘」であり、「国家と云ふ」ものはいらぬ、ただ、寄りそつて生きている人間があるだけだ。しかしながら、巧妙な訳と伏字によつて読みづらいつといへ、最後の一行は直裁に読者を打つであろう。「我々は互に愛し合はねばならぬ、でなければ死ぬよりほかにはない」。のちに削除されることになる一連の一行である。 “We must love one another or die.”

夜にぼつぼつと光る燈火を見ながら、「一九三九年・九月」は、このように結ばれる。その燈火と

同じ虚無と絶望とに  
 取り圍まれて、私は  
 ひとつの肯定的な焰を放つことが出来ようか。

詩人は「肯定的な焰」を求める。ただし、それは決意ではない。「虚無と絶望」が圧倒しているのだ。スペイン内乱は人民戦線の敗北に終わり、いま、新たな大戦が勃発した。結局、「スペイン」の結びにあるように、完全に「星は死んだ」のであり、「歴史は打ち負かされた者に / 悲しみの言葉」を送るばかりなのだ。のちの鮎川が「スペイン」に「一九三九年・九月」の「挫折感」を重ねあわせる<sup>100</sup>のは故なしとしない。

「一九三九年・九月」について、1940年2月号にふたたび「オーデン詩抄」が掲載される。4回にわたる連載で翻訳されたのが13篇であった<sup>101</sup>。テキストは1933年の『詩集』(Poems)第二版から採られており、その収録作品30篇すべてを訳出する企画があったと推測される。しかし、この2月号で終わる。同号はオーデンが「ブルツクリンに居を持ち定住することにした」と伝えたが、アメリカからの便りは、これをもって杜絶する。これを境に、同誌上で、さまざまな評論に引用された詩行をのぞいて、オーデンの新しい詩を読むことはできない。デモクラシーの国、オーデンが「ナショナリズムなどといふもの」は存在せず、「人間があるのみ」、と語ったアメリカはもはや「局外中立の空」の下にありつづけることができなくなるからである。

『新領土』3月号の「後記」に、上田保が記している。「最近丸善などへ行つてみると、洋書の文庫類の棚までが非常に減少して、ほしいと思ふ本も容易に手に入らないやうになつた」<sup>102</sup>と。また、彼が海外の情報を収集していた『セルパン』ですら、この頃、ヨーロッパでの開戦の余波をうけて、週刊誌類の到着が遅れるばかりがこの年新緑の頃までは一時途切れていた<sup>103</sup>のである。

木下常太郎は「久しぶりに」『新領土』を手にして、『文藝汎論』5月号、「詩壇時評」にいう。

何か寂しいものを感じた。美しく飾られた死體を見る感じだ。かうした性質を持つた雑誌ほど時世を反映するものはない。かゝる場合にかうした雑誌は思い切つて廢刊する方がいゝか、それとも次の時節を忍耐強く待つべきかを考へてみた<sup>104</sup>。

そして、「一時解体の方が賢明なのではないか」という結論にいたる。その理由は、「この雑誌の特色はその詩よりも、新しい外国文学の紹介や翻譯」にあり、「その種本が容易には手に入らなくなつた時代であるから、その得意とする特色を示すことが出来ない」からである。

1940年5月号『新領土』の「後記」に、近藤は、「とやかく噂のある「VOU」の関係者である」木下のコメントに反論する。彼は「我々の詩が我々の雑誌」を必要とするのであって「新しい外国文学の紹介」のみでない。しかし、苦慮は隠せない。

それにしても、新しい外国文学書籍・雑誌の入手困難は木下氏の指摘された通りであつて、我々の最も痛いところではあるが、それとても目下のところ「新領土」の興亡にまで影響するとは考へて居ない。(略) 實際のところを言へば、種本の入手困難よりも、それを進んで紹介・翻譯してくれる「人」が少なくなつたことが目に立つて居るのである<sup>105</sup>。

しかしながら、1937年5月号の創刊から3年、『新領土』が巻を改め新しく出発するこの1940年5月号、近藤の意気はなお軒昂であつた。

我々の理想から言へば、我々の解体する時は、日本の詩人全部が「新領土」同人となる時が日本の讀詩階級全部が「新領土」のそれである時しかないのである。

ほどなく『VOU』に展開された「従來の藝術運動」<sup>106</sup>は「解体」するが、いわゆる「進歩的」な詩誌、『新領土』は残る。しかしながら、近藤の「理想」は彼の思惑とは異なつて展開するであらう。

### 23. 陰翳の旋律

1940年4月、予科を終えた鮎川は大学に進む。『新領土』5月号に、彼の「形相」が掲載された。

おそらくは實らぬであらう樹木  
 おそらくは咲かぬであらう花花  
 乾燥した粘土の上に風だけの虚しさが  
 透明な耳のあたりを吹く  
 それらの悼ましい怒でおれの日記を汚すな  
 だがおれは聲高く笑ふために  
 白く美しい齒をもたぬから  
 なんぢら安心しろ  
 悲しみは額のあたりの翳ではない<sup>107</sup>

かつて、二年前、『新領土』1938年3月号に掲載された鮎川の「遊園地区」は、こうはじまっていた。

岸邊では演奏會が開かれる  
 蝶々は光る河を渡る  
 タンポポの花粉をつけて  
 青い帽子の微風が通り  
 羊が雲を食べにくる  
 赤い屋根の學校は  
 風下に建てられてある  
 明るいシャボンの中から轉がり出た  
 鈴を振るかすかな音よ<sup>108</sup>

遊園地区に響く岸辺の音楽とともに、ものの輪郭は明晰であった。しかし、いま、輪郭は失われた。

また、鮎川は1938年5月号『新領土』の、「亞細亞」詩篇「河」に唄った。

まだ阿片でぼうぼうと煙つた眼よ  
あ見給へ 昏い河の上を齒を剥いた白馬が亂れるではないか<sup>109</sup>

かつての、巧妙なサタイアもまた、すでに、失われた。季節の終わりに森川の聞いたあの「骨を折る音」が奏でる「悼ましい怒」をひき受けて、鮎川は唄いつづけるのである。

予科を退学して故郷に帰った森川に、鮎川は手紙を書いた。1940年7月1日付の消印である。彼は英文科の尾島庄太郎の講義<sup>110</sup>風景を報告する。尾島は英詩でよく扱われる小鳥の啼声のレコードをかけた。

ナイチンゲール、カツコー、つぐみ、ロビン、木鳩、ブラック・バード、にはとり、など。煙草をふかしながら、2時間。尾島の近代英詩の講義をレコードの伴奏入りで聞いてたのしかつた。一番おしまひにジヨイスの「FINEGANSの蘇生」をジヨイス自身が吹き込んだやつをかけてくれた。これはこの日の最も楽しい収穫であつた。おどろいたことにはジヨイスを知らない学生が居たことである。尾島がスペンダアヤルリスやオーデンの話をしたが、解る者が果して何人ゐたか甚だあやしいものだと思ふ<sup>111</sup>。

鮎川たちにとってはこれら三人の詩人はすでにお馴染みの存在であつた。級友への優越感、詩や文学を語りあつた森川との絆で結ばれている。そして、さらに重要なことは、鮎川が、そのひとりオーデンが、「ナショナリズムなどいふものは何も意味しない」国、アメリカに「< 亡命 >」し「定住」したことを知っていたことだ。

同じ手紙で詩の仲間の動向を伝えつつ、鮎川は自らの姿を書き加える。「彼は少々退屈になつた。退屈になると同時に少々怠惰になつた徴候がみえる」と。手紙はこのように結ばれた。「今、本当は悵鬱なんだよ。さよなら。信夫」<sup>112</sup>。この憂鬱は、森川にもそして詩の仲間にも、ただちに、共

有されるものであった。

国民徴用令が実施されたのが、この月、7月15日である。ついで、26日、「基本国策要綱」が閣議で決定される。このいわゆる「新体制」によって、大東亜新秩序、国防国策体制、翼賛政治の確立が定められたのである。

鮎川の8月30日付「陰翳」は、『新領土』10月号に掲載された。

午前  
の霧にぬれながら  
斜めにのぼる階段と  
街を見降ろす廊下には  
おびただしいドアがあつて  
虚ろな跽音が  
大理石のうへを這つてゆく  
いふまでもなく  
木木の下にのみ朝がきます  
あれでいいのですね  
でも音楽だけはいつでもやつてみてほしい と  
誰かかすれた聲で囁く  
窓からは  
まぼろしのやうな橋がみえ  
その下の澄んだ水のほとり  
葦がそよぐ  
この管はなんだか眠いやうな音をひびかせる<sup>113</sup>

木々の下に、朝の光が陰をつくる。しかし、街の風景は茫洋としている。本物の「陰翳」は、詩人の裡にあるからだ。風景が明暗と輪郭を与られ、オーデンが歌ったように、その陰翳とともに風景が「肯定的な焰を放つ」ために、「音楽は絶え間なく奏されねばならぬ」のである。パスカル<sup>114</sup>は人間を葦に喩えた。だが、すでに考える力も萎えたものにとって、その葦が奏するはずの音楽も、ふたたび陰翳へと誘う。ここに、オーデンの挫折をひき受けた鮎川の姿がある。

「一九三九年・九月」のオーデンは、「亡命者ツキジデス」のように、デモクラシー、独裁者、そして帝国主義が覇権を競った30年代を、新たに回顧しつつあった。だが、新体制のもと、鮎川はオーデンの「虚無と絶望」を、おそらく、オーデンよりも深く共有していた。1940年8月30日の「陰翳」には、一年前、1939年9月4日、オーデンの「スペイン」を響かせながら「雑音の形態」<sup>115</sup>を書いた鮎川の面影は、もはや、ない。

オーデンはこう唄った。

明りは消されてはならない、  
音楽は絶え間なく奏されねばならぬ

だが、鮎川の反応は、こうである。

あれでいいのですね  
でも音楽だけはいつでもやつてみてほしい と  
誰かかすれた聲で囁く

「かすれた聲」こそ、オーデンをひき受けた、新体制下の鮎川たちの肉声であり、「音楽」は海の彼方、アメリカというオーデンの新領土から、とぎれとぎれに響くばかりであった。

7月1日消印、尾島の英詩講義を伝える同じ手紙に、鮎川は記していた。

凄い詩を書かうと思つて「形相 泉の変貌。白昼の眠りの襞。夜と皿と水。」のテーマを考えたが、どうも巧く書けないので放つたらかしてある。小説も放つたらかした。辛うじて「秩序について。」 エツセエ の資料あつめの退屈な仕事をこつこつ続けてゐる<sup>116</sup>。

「泉の變貌」<sup>117</sup>は完成した。9月20日付である。1940年11月25日発行の『詩集』に掲載された。『LE BAL』という外国名は好ましくないとして、この号から改題されたのであった。



わたしは象どられた世界から迂りでて  
緑の泡の方へ近づいてゆく  
とねりこの木に凭れ  
讒言のやうなものを  
じぶんの耳で聞いてある  
書籍をなげうつて  
考へただけでうつとりするのは  
哀れなことにちがひないと思ふ

微風はわたしの肩に觸れる  
あなたは何處に立つてゐるのか  
ゆれてゐる椅子の影は  
樂器よりももつと柔らかにくねる  
けれどもなめらかな旋律は  
もはやどんな力も持つてゐないことを知れ  
わたしを<sup>ママ</sup>蔽ふ  
小枝や  
葉脈から  
露が落ちてきて  
しぜんに頬がぬれてくる  
それは涙に似てゐたのかもしれない  
あなたは  
泉のまへに膝まづく  
ゆるい流れが髪をほぐす  
水の底にはいつも鏡のやうな階段があつて  
愛も  
憇ひも  
みんなそこに  
憑かれたかたちで眠つてゐる<sup>118</sup>

「象どられた世界」から彷徨いでて泉に近づく。とねりこの木に小鳥の声はない。聞こえるのは、わたしの内部からもれる「譏言のやうなもの」である。泉に映る椅子の影が微風に揺れる。水が揺らく「旋律」は音楽に似ている。しかし、慰めにはならない。わたしは、ひたすら、その揺らぎの彼方、泉の底を凝視するのである。

わたしたちは、この年、1940年の鮎川の最も優れた作品の一端を垣間見たにすぎない。「泉の變貌」が、やがて、形而上的な世界へと変貌するさまについては、章を改めて検討しなければならない。

## 24. 日本詩の夕

オーデンの「一九三九年・九月」を掲載した1940年1月号の『新領土』に、春山行夫「収穫期 (Fragment)」が登場する。

小麦の収穫が終つたら  
 ダンチヒ問題が悪化した  
 飛行機がチエラルミンの美学を捨てた  
 未来の上に白墨の線が縦横に引かれる  
 現実があらゆるモラルに影を落す  
 政治家と詩人と綿花商人が  
 赤い自動自轉車で運ばれる

ドイツがポーランドへ侵入を開始したのが、1939年9月1日であった。3日、英・仏はドイツに宣戦を布告した。飛行機は、モダニズムあるいは新即物主義の「美学を捨てた」のである。4日、わが国の政府は、欧州戦争に介入せず日支事変の解決に邁進する、と声明した。アメリカは不介入中立の立場を表明した。

葉巻をくはへたグルーチヨ・マルクスと  
 腕章をつけたチャツプリンが

## 新しい歴史のコメディに登場

タイトルは Great War II だ<sup>119</sup>

葉巻はイギリス人のステレオタイプだが、奇しくも、チェンバレンについて「葉巻をくはへた」チャーチルが挙国一致内閣の首相となるのは、この年1940年5月10日のことである。ヒンケルに扮し「腕章をつけたチャツプリン」の『独裁者』は、1939年9月に制作開始され、10月15日、ニューヨークで一般公開<sup>120</sup>された。わが国では詩人たちが新しい体制のもとにはせ参じる月のことであった。『セルパン』11月号の「雄鳥通信」は、8月26日付『ニューヨーク・タイムス』の記事から「チャアライ・チャツプリンのナチズムを諷刺した新作喜劇「獨裁者」が二年間を費やして完成された」<sup>121</sup>と紹介した。しかし、わが国で上映されることはありえない。そして、春山はもはや『セルパン』の編輯長ではなかった。

この年、1940年2月22日、『文藝汎論』賞の選考<sup>122</sup>が行われ、村野四郎が受賞した。対象となったのは、前年12月20日刊行の、ドイツの写真家リーフェンシュタールとウォルフらの作品をつけた『體操詩集』<sup>123</sup>である。構成は北園克衛があたり、限定500部、贅沢な詩集であった。表紙を含め16葉の写真のうち5葉は、リーフェンシュタールによる1936年のベルリン・オリンピック写真集<sup>124</sup>からとられた。北園は序に記す。「著者はこの詩集に於て、潑瀾たるライカの眼と比類なきエスプリ・ジオメトリックを以て爽快なエネルギーの線を一瞬の空間に把えてゐる」<sup>125</sup>と。ここにいう「體操」とはラジオ体操のことではなく、いわゆる競技種目としての体操である。

近藤は『新領土』2月号の書評「體操する主知」に、これは、「スポオツなる大衆的現象を通して、飽くまでも彼のサテイリカルでペシミックな人生を披瀝」している、と評し自らの「諷刺的方法」を投影する。ただし、「何故に外國の寫眞の複製を使用したか。」村野によれば「およそハチマキをしたスポオツマンなどは僕の好む形態ではないので敬遠した」のである。近藤はいう。「これは眞に審美上から同情に價する。しかしそれだからと言つて日本にカメラがないわけでもないのに、複製を使用したといふことは單なる便宜主義に外ならぬ」<sup>126</sup>と。近藤は村野の「便宜主義」に、おそらく意識せず

に、主知主義あるいはモダニズムの審美眼と日常の風景あるいは思想性との乖離を指摘していたのだ。日常のハチマキを審美眼のゆえに排除した村野の作品は近藤の「新しい戦略」とは無縁であった。このとき、村野はつづく二つの詩集、『近代修身』と『抒情詩集』を構想<sup>127</sup>していた。

のちの村野によれば、ここに描かれた人間は、「人生観で濡れた通俗的な人間ではない。外界の物と同じように、世界を構成する一個の物として冷静に客観され」ており、詩の形態の「直線的明快性は、即物主義における即物的で技術的美しさ」を具現する<sup>128</sup>ものであった。

他方、中国から帰国して『セルパン』2月号から「満州國の印象」の連載をはじめた春山は、2月に入って「連日のやうに會合がつづき、そのうへ東京市紀年事業の東亞操觚者懇談會に四日間出席」<sup>129</sup>するなど、あわただしい日を送っていた。そして、どういわけか、「東亞文化のなにかの一役を命ぜられたかのやう」に、彼のもとに「外地からの色んな雑誌」が送られてくる<sup>130</sup>のであった。「東亞操觚者懇談會」すなわち、東京市の二六〇〇年記念事業として開催された「日滿支操觚者懇談會」は「満州國並びに中國側の新聞・雑誌編輯者百名、日本側から同じく百余名が参加」<sup>131</sup>したのである。それが「新しい歴史のコメディ」であったか否か、春山の念頭にはなかったであろう。それだけで終わらなかった。2月の「東亞操觚者大會に引きつづいて」3月は「詩人懇話會の「日本詩の夕」の世話役」として奔走した。「佐藤惣之助氏に、一四五年ぶりの詩人の會だと言はれたが、まつたくさうだと思ふ」<sup>132</sup>と記すように、画期的なものであった。

『新領土』の編輯にあたっていた永田助太郎は、3月号「後記」に記している。

来る三月二十三日、午後五時（土）、詩人懇話會主催で「日本詩の夕」を産業組合中央會館（東日裏）で催す。會員春山行夫氏から『新領土』に申込みがあつたので、総合的なものではあり、大乘の見地から参加することに決定した<sup>133</sup>。

しかしながら、『新領土』同人のなかに、この決定に、些かのためらいがあ

ったことは明らかである。村野の反応はこうである。

詩人懇話會主催の詩の會への参加を「新領土」も求められて参加することになったが、斯うした性質の會に参加することが「新領土」の進む方向と抵觸しないかどうかと言ふことも一應考へられないわけではない。私達は外界の情勢によつて、いたづらに私達の文學行動を消耗させるわけには行かないからである。

しかし私達は次のやうなことを知らねばならない。それは、かう言ふ種類の極端な處女的潔癖性が、いつも藝術派から廣さと逞しさを奪つて來たといふことである。いつも狭い世界へ、窮屈な意味の中へ収縮しようとすることから、新しい藝術派は故意に反逆する必要がある。これからの藝術派は、あらゆる點に於て新しい政治の部面を持つべきであらう<sup>134</sup>。

近藤は、ためらいを隠さない。

詩人懇話會の本年度受賞披露の意味で、日本詩の夕をやるから参加しろといふ招きをうけて《新領土》もこれに應へることになった。この號が出る頃には濟んで居る筈である。早急の場合、不満が多かつたにかかはらず、獨斷先行で二人の代表がこれに出席した。もとより我々の春山氏が個人としてはあるがその會の委員である上は當然の行動ではあつた。しかしこのことは飽くまで一つのモラル・サポオトであつて、日本詩の夕に全幅的な喝采を送つて居るものではないことを表明しておく。いや、今回のそれには、といふ頭書をつけておく必要があるかも知れぬ<sup>135</sup>。

村野と近藤の反発には根拠があつた。「日本詩の夕」は、村野がいうやうに、たしかに「外界の情勢」が企画させたものであつた。そればかりではない。春山が関わる詩人懇話會の背後には、「日本文化聯盟」の松本学の影があつた<sup>136</sup>からだ。松本は日本文化聯盟を構成するひとつとして「文芸懇話會」を發足させ物議をかもしたが、つづいて「詩歌懇話會」が彼の肝いりで生まれた。この詩歌懇話會が1938年4月に解散し、「詩人懇話會」が誕生したので

あった<sup>137</sup>。解散時に松本から渡された金をもとに、詩人懇話会の新人賞がもうけられた。春山は詩歌懇話会の発足時からその会員であり、詩人賞の選考委員でもあった。第一回詩人賞は佐藤一英の『空海頌』が受賞したが、その選考をめぐる北原白秋と室生犀星のあいだの論争はすでに知られていた<sup>138</sup>。今回、第二回の詩人賞は注目的であったのだ。『體操詩集』の村野は三好達治と競りあい、三好と決まった。春山は「詩人懇話會の記」に「新しいシステムで詮衡」することとなったと記し、この過程を詳細に述べている<sup>139</sup>。夕刻の会に先立ち午餐会があった。同じく春山の筆である。

「日本詩の夕べ」の當日、午後三時半から丸ノ内Aワンで受賞者を迎へて詩人懇話會の午餐會が催された。當日は會のためにつくされた松本學氏や長谷川巳之吉氏も出席され、なごやかなひとときであつた<sup>140</sup>。

長谷川が詩人へ示したさまざまな配慮は別として、詩人懇話會の詩人賞の賞金は、松本の日本文化連盟の金を基金としていたのだ。

3月23日、詩人懇話會主催「日本詩の夕」は、近藤がいうようにこの詩人賞受賞披露をかねた詩の朗読会であった。『春の岬』と『艸千里』の三好達治が選ばれ、島崎藤村から詩人賞が渡された。三好はまた、詩人賞受賞者にたいして新設された長谷川賞もあわせて受賞した<sup>141</sup>。選考会に出席した委員は、河井醉茗、西條八十、前田鐵之助、大木敦夫、白鳥省吾、堀口大學、佐藤惣之助、春山行夫、そして、百田宗治<sup>142</sup>であった。

「日本詩の夕」に出席した村野は、開幕を待つ人々のなかに、関係者のほかに、草野心平、北園克衛、さらに高村光太郎の姿を見る。朗読者は、賛助団体である「我國の主要な雑誌『コギト』『四季』『女性時代』『詩洋』『新領土』『VOU』『文藝汎論』『蠟人形』の諸雑誌から選出された選手達」であった。村野によれば、「和やかな美しい雰囲氣」<sup>143</sup>であった。春山によれば、「氣持のいい落ちついた詩人祭であつた」。招待状による来会者約300名、一般参加者220名、あわせて520名を越える会であった<sup>144</sup>。

長谷川も『セルパン』に記す。

過去十年、詩人は世の悪潮流に押し流されて、アポロに対する渴仰の信念を失つたやうであるけれども、然し時が来たのだ。詩人懇話会賞が極めて公平な投票方法に依つて三好達治君に授與されたといふこと、私はこれをアポロの復活する時が来たのだと歡喜してゐる。従つて懇話會賞授與式は詩の復活祭を意味する日本詩史の特筆すべき事蹟であると惟はずには居られない。殊に授賞の任にあたられた島崎藤村先生のユーモアは會場の空気を實になごやかに、和氣藹々、臨席者を感嘆せしめずにはおかないものがあつたであらう。当夜演壇に立たれた萩原朔太郎の風貌の立派さ、過去十数年親しくお目にかかつて來てゐる私も、その夜のやうな萩原氏の風貌に接したことは初めてである<sup>145</sup>。

「アポロの復活する」夕べは大物詩人を配して豪華であつた。ただし、反応はさまざまであつた。

『新領土』に寄せた志村辰夫「『日本詩の夕』メモワール」によれば、授賞式につづいて萩原朔太郎の講演「詩の新興機運について」があり、朗読となつた。『新領土』の「二人の代表」とは、近藤と永田であつたと思われる。志村によれば、自作を朗読した詩人は13名。「過去の詩人と現代の詩人」の違いは鮮明であつた。近藤は「ブラウニングなんて既にノピストルの名前ダア 諸君！」と読みあげた。「二階は空席。しかし、早春の農苑の如く階下一杯の聴衆諸氏諸嬢の沈黙」があつた。永田は「満場の淑女並びに紳士諸君！ノ鳥には神聖な意味がある」と呼びかけた。最前列の女性はしのび笑いをしたという<sup>146</sup>。「朗讀は文藝汎論賞を受賞した山本和夫の戦争詩から始められた」<sup>147</sup>のであるが、志村はふれていない。

近藤もちがっていた。

文藝汎論賞を村野が貰つた。その節の萩原朔太郎氏の言は非禮である。曰く『僕はJ君を推薦したのであつたが、新人といふよりは、むしろ大家に屬すると云ふ理由で失格となつたので、他の人々を選ぶことになつた』といふのである。これでは村野や山本氏がJ氏と變なところで價值判斷されてゐることになる。先輩としてのかういふ言ひ方は非常に輕卒

であらう<sup>148</sup>。

これは、志村と同じように、近藤の村野への身びいきでのため、とはいいい切れない。

「日本詩の夕」は「和やかな美しい雰囲気」であったとはいえ、それは村野が記したように「外界の情勢」が企画させたものであった。近藤が「本詩の夕に全幅的な喝采を送つて居るものではない」と断り書きをつけたのは、旧詩人と断然その詩法を異にする『新領土』が、これら詩人とともに会を持つことへの反発ばかりでなく、「氣持のいい落ちついた詩人祭」の背後を見抜いていたためである。ただし、すでに見たように、村野は「これからの藝術派は、あらゆる點に於て新しい政治の部面を持つべき」ことも認識していたのである。

瀧口修造は別のことを考えていた。瀧口によれば、この夜「多くの詩人達の自作詩の朗讀を聞いたが、マイクの設備があるのに、この機械の表現効果を意識的に利用してゐる詩人は皆無であつた。」「詩に聲を興へることは、今日の新しい詩人の間でも實驗的な課題」であるが、まだまだ「實際上困難な問題」<sup>149</sup>であつたのだ。

『VOU』の北園克衛は、最近の詩集編纂や詩壇の論調で、『詩と詩論』以降の歴史が「全く忘却されてゐる」傾向を非難し、「若きゼナレイションに屬する詩人は冷靜に批判の倫理的基礎を確立すべきこと」<sup>150</sup>を説く。そして、彼の詩人懇話會授与式に関する見解は異なつたものであつた。

尚去る三月詩人懇話會賞授與式に際して、詩人懇話會員が贊助團體に對して採つた非紳士的態度に依つても明らかであつた如く、彼らに於ても既に若きゼナレイションを功利主義的に利用する以外に何のシンセリテイも持たないことはその行為に依つて歴然と證明されたのであつて、彼らは若きゼナレイションの贊助を乞ひ乍ら、當日の講演に於いてはあからさまに若きゼナレイションを攻撃し、挑戦したのみならず、大部分の者は會の終了前に歸宅したばかりではなく、會の終了後一ヶ月を經過しても贊助團體並に朗讀者に對して一言の挨拶も行はないといふ徹



底的な無禮を敢へてしたのである。勿論自分は参加團體の一員として、この無頼漢的行為を看過する者ではないとはいへ、斯の如き場合に於ける團結力の脆弱は若きゼナレイションに痛酷な反省をうながすものでなくて何であらう。

北園がくりかえす「若きゼナレイション」とは、モダニズムに組する世代をいう。

北園の抗議にたいして、鮎川は冷静であった。『蠟人形』に寄せた6月19日付「抗議への抗議」で、彼は北園が「新しい詩の傳統が全く無視されたことについて述べ、一般ジャーナリズムの偏見に對して忿憑を漏らし、近代詩の正統性を攪亂しようとする一部の詩人の陰謀的行為を詰」ところを正当としながら、問題は「むしろ詩人自身の責任」にあり、「新しい詩を文化的に高めてゆく場合にも屢方法的に拙劣であつたことが禍ひしてゐるのではなかつたか」<sup>151</sup>という。

モダニストたちの歯ぎしりをよそに、詩集の刊行がつづいた。ひとつが、3月の萩原朔太郎編『昭和詩鈔』<sup>152</sup>であり、また、5月からはじまる『現代詩人集』<sup>153</sup>である。のちの視点からすれば、昭和の現代詩の総括期にはいっていたのである。他方、「一時解體した方が賢明なのではないか」という木下の意見にもかかわらず、『新領土』はなお存続するであろう。ただし、目指す新しい詩の「領土」はすでに「圍繞地」であった。

ヨーロッパ戦線は緊張をはらんでいた。フランスは6月17日にドイツに降伏。8月11日、ドイツはイギリスに空爆を開始する。室伏高信は、かつて、ミュンヘン危機が回避されたとき、それを「政治の勝利と呼ぶもよく、また知性の勝利と呼ぶもいい」と喝采した。ただし、「ヨオロッパに、もしも第二次世界大戦が勃發したとしたなら、少くともその中心地帯は、一個の廢墟化するものと考へられなければならない」と記した<sup>154</sup>。それが現実となったのである。

第一書房が、訳者を室伏高信として<sup>155</sup>『我が鬭争』を刊行するのが6月15日。『セルパン』7月号の広告である。

これは偉大なる英雄の書であると同時に新しき民族の世界的指導書である。今や新東亞建設を基礎として世界秩序建設へとその歩を進めつつある我等は、この書に新しき世界の暁を聴くであらう。佛蘭西が本書を指して世界の表面を變換させる噴火山と呼んでゐるのも蓋し當然だ!!<sup>156</sup>

8月号の『我が闘争』の広告欄では、社主の長谷川巳之吉自らが署名をつけて記した。その全文である。

僕は斷乎たる排英派の一人である。日支事變以來、我々は英國のために如何なる邪魔だて妨害を受けたかを思へば、僕は奮然暗涙なきを得ないものがある。茲に本書を刊行した所以は、今こそ本書をもつて親英派の迷妄を根本的に打ち破るべき好機到來を僕は信じたからである。

僕は自己の主張を直接表面的に發表しないが、しかし僕は自己の出版物をもつて最も強く自己の意見を主張する。従つて[杉浦重剛]『選集 倫理御進講草案』並びに[大川周明]『日本二千六百年史』の巨弾を放射したことも、之れによつて我が國體精神の向ふべき歸趨を明らかに絶叫したのである。要は我々朝野の一致團結にあるのだ。

今や我々は國家總力戰體系の樹立に急ぐべき時、茲に戰時體制版の巨弾として『我が闘争』を送る所以を明らかにする。

第一書房 長谷川巳之吉 敬白<sup>157</sup>

同号巻頭におかれたウインダム・ルイス「ヒットラア論」<sup>158</sup>は、『我が闘争』の販売戦略のひとつとなりうるものであった。しかも、この記事を採用することは春山の判断であった。

『新領土』7月号の「後記」に、春山は Wyndham Lewis, *The Hitler Cult* を三越で買ったという。この書は、ミュンヘン会談ののちに書かれ、前年1939年12月に刊行<sup>159</sup>されたものであった。春山の手許には、同じ著者が1931年に刊行した *Hitler*<sup>160</sup>があった。「本格的な文明批評家でヒットラアについて二冊も本を書いたのは、ルイス一人だけ位」であった<sup>161</sup>。『セルパン』8月号「ヒットラア論」の「解説」は、明らかに春山の筆によるものである。春山

によれば、第二の書『ヒットラア崇拜』はアンドレ・ジイドの『ソヴエト紀行修正』と同じように、「ヒットラアの魅力の虜になつてゐた」頃の第一の書の「修正」であつた<sup>162</sup>。しかし、採用されたのは旧著『ヒットラア論』であつた。春山によれば、二つの論を併載する予定であつたが、「第二のヒットラア論の書かれた意圖が、第一のヒットラア論とは全く異つた立場にあり、むしろ「ヒットラア、並びにナチズムの批評としては前著に充分盡されてゐる」からであつた。また、「第二の書を検討する十分な時間のなかつたことも、その一理由」<sup>163</sup>であつた。抄訳「ヒットラア論」は、その「結語」にいう。「まことに、アドルフ・ヒットラアは、一つの徴候であり、出発点であり、ヨオロッパの表面で政治的英雄として喝采される得る唯一人の人物である」<sup>164</sup>と。事情はともかく、1940年夏の文脈においてみれば、ヒットラーの『我が闘争』を支持することになるのは必然であつた。

『セルパン』8月号が書店にならぶ頃、政局混乱のなか、7月22日、第二次近衛内閣が発足する。26日、「基本国策要綱」が閣議決定される。長谷川という「國家總力戦體系の樹立」の志は「新体制」に呼応するものであつた。

新体制の閣議決定と同じ日、7月26日、内務省は東京出版協会と日本雑誌協会の代表をそれぞれ招き、出版一元化体制の具体化を指示した。さらに、8月5日、同じく内務省はこれらの代表を招致し、出版体制にたいする当局の決定案を示した。そのひとつが、用紙の割当であり、また、出版界一元化のための社団法人組織の創立であつた<sup>165</sup>。

村野は、『新領土』8月号の「後記」を、突然、このように書きはじめる。

かういふ世界的動亂の最中にリーフェンシュタールの「民族の祭典」が私達の前に現はれたことは、おもしろい皮肉であるいやこれは皮肉ではないかもしれぬ。なぜならこの世界戦争は正に民族の祭典ではないか。誰れが頭の上に月桂樹の小枝をのせて、白い臺の上にのぼるかは想像の限りではない<sup>166</sup>。

村野は6月19日からはじまった邦楽座のロードショウ<sup>167</sup>を見たのであろう。鮎川が「でも音楽だけはいつでもやつてゐてほしい」と「陰翳」に書いた頃、

8月25日から全国一斉に、話題の映画『民族の祭典』は一般公開された。

## 25. 詩人の祭典

9月27日、日独伊三国同盟が結成された。大政翼賛会が結成されたのが、10月12日である。長谷川が『セルパン』編輯長更迭を告げたのがその9月号である。10月号、ドイツ哲学者大島豊「新編輯者の言葉」である。

新政治体制の綱領草案が発表された。それに依つて、(一)東亞新秩序の建設、(二)舊來の積弊を芟徐して國防國家體制の完成(三)大政翼賛の臣道の貫徹、等が不變の理念として確定されることは疑ふ迄もない。

そこで綜合雑誌も亦、この新體制の理念に合致するやうに編輯されるのみでなく、その國民運動の一翼として奉公するべき任務をもつ。そしてもし雑誌が舊來の積弊を芟徐せず、この國民運動に參與することが出來ぬなら當然これは廢刊した方がよい。同様に本誌も亦、今迄のやうに渋滞してゐるならこれは全く存在理由がない。

この雑誌が新たなる理念を蔵し、革新の意気に燃えて再出發する為には、今迄のジャーナリズムに毒されてゐない新人の出現が絶対的に必要である。随つて新建設に反する社會惡を排撃して正道を示す為に、獻身の眞劍さに生きる者でなくてはならない。文章だけ巧妙であつても、新國民運動の推進力になれぬ者は、もはや現日本の思想家でもないし、文明批評家でもない<sup>168</sup>。

10月、『VOU』第30号は、巻頭に「ここに於いてわれわれは過去六年間に互る從來の藝術運動を本號を以て終了し、直ちに民族精神の新興に寄与する清心比類なき民俗藝術の樹立とその適正なる實踐のために發足することを宣言」<sup>169</sup>し、『新技術』と改題された。他方、『新領土』10月号は、その「陣容を一新するために」次号から春山が編輯を担当することを告げた<sup>170</sup>。ただし、11月号は発行されなかった。12月号は11月に登場した。ここに村野は、この秋を唄った。

新しい祭典はどこに始まつてゐるか  
たぐい  
 類まれな祭典はどこに始まつてゐるか  
 この古い民族をめぐつて 遠く  
 金属は加工され  
 鳴りかがやき  
 新しい精神の嵐の中で  
 花のやうに咲きみだれてゐるか

道のべの熱い菊の花にも  
 見えない轟きがある  
 百日紅の枝を透く淡い秋雲  
 その輝きにさへ  
 清冽な鐵の匂をかかげよ<sup>171</sup>

皮肉ではなかった。「世界戦争は正に民族の祭典」であった。村野は「新しい精神の嵐」のなかに「清冽な鐵の匂」を求めるのだ。

日本文芸家協会は、9月25日、「文壇に於ける新体制の問題」に関して、全会員の懇談会を開いた<sup>172</sup>。「当局より新たに文芸国策の樹立をみるものが既定の事実である以上、全文壇を網羅して政府へ進言し得る機関を設立し、政府へ協力することがこの際の緊要なる処置である」として、準備に入った<sup>173</sup>のである。10月31日、「日本文芸中央会」が発足した。

その間、10月21日、「日本詩人協会」結成のための打合会が開催<sup>174</sup>された。朝日新聞によれば、「内閣情報部、内務省圖書課の斡旋によるもの」であった。同日、東京詩人クラブは「文藝家新体制の大過渡期にあたり新しい精神と新しい組織による活動を期して新文藝体制確立のため解散」<sup>175</sup>し、日本詩人協会に統合されることとなった。同協会は「日本文芸中央会」に加盟<sup>176</sup>した。日本詩人協会を代表して中央会の常任委員となるのが、村野である。

「紀元二千六百年記念式典」が皇居前で開催されたのが11月10日である。日本各地で同様の祝賀行事が行われた。『新領土』1月号に山本和夫はこう書

いた。

街に村に、日の丸の旗があふれ、ラヂオは国歌と皇紀二千六百年を壽ぐ歌を朝から歌ひつづけてゐる。

私が鎮守の森の傍にいで、この日の青く澄み渡つた秋の空を眺めてみると、私のそばを小さな國旗を振り、可憐な感激のプロペラをルルルルと廻しながら、音樂隊を先頭にして幼稚園の園児が、キゲンハニセン六ピヤクネン　とうたひながら續いて行つた。

私はその姿を見送り、涙ぐましい複雑さに襲はれた。この涙ぐましさには就いては、今ここに述べようとは思はぬ。幾年後かに、私が語る餘裕をもつまでは、　いや、これは鋭利な歴史家が、幾十年後に代辯するであらうと思ふ<sup>177</sup>。

新しい年を迎えた1941年1月、日本詩人協会は「詩人祭」を開催した。

『セルパン』3月号に村野が寄せた記事「詩人祭の夜」によれば、日本詩人協会は「數次にわたる打合會を経て」、12月に綱領と規約を決定し、趣意書を「各文化機關へ一齊に」送つてその結成を傳達した<sup>178</sup>。「趣意書」はこうである。

私達は現下諸情勢の急流に處して、純乎たる詩人の仕事を強化し、詩に於ける國家的使命を積極的に多難なる時代の上に活すために、左記のごとき綱領を掲げ、一切のセクト的意識を抛擲し、無實なる名聲を排して、ここに全詩壇の主力を網羅せる強力なる活動體、日本詩人協會を結成した<sup>179</sup>。

その、六項目の「綱領」。

- 一、詩歌を以て雄渾な民族精神の創造に資す。
- 二、詩歌を以て國防精神を作興し、銃後生活の強化に資す。
- 三、詩歌を以て國語の純正化を期し、その推進の實現に資す。

- 四、詩歌を以て國民生活の情操を豊潤ならしめ、明朗なる希望の昂揚に資す。
- 五、詩歌を以て各職域に於ける新生活倫理の實踐に資す。
- 六、詩歌を以てその他凡ゆる文化の興隆に資す<sup>180</sup>。

「かうして日本詩人協會は明確なイデオロギを以て行動へ發足した」のである。協会の総数は39名、「實際に今日の詩壇を動かしてゐる主力を集めた」<sup>181</sup>ものであった。

村野の文章は、紙幅の許すかぎり引用に値する。新体制への迎合として片づけることはできない。なぜ、この協會が生まれたか。「それは急迫した時代が、若い詩人達に一つの反省を喚び起したから」である。村野は記す。

一體、現代詩の發生以後、詩人達はどれだけの寄與を國家になしてきたであらうか。今日までの詩人の仕事のトータルはどんなものであつたか。空虚な孤高と尊大。極めて偏狭な自己完成のドグマ。國民性を無視した海外文化のイミテーション。それから他人ごとのやうな揶揄と諷刺等々。

詩人は、嘗て一度として國民の運命を眞に積極的に分擔しようとする情熱を示したことがなかつた。

これらに関する謙虚な詩人としての反省が、この日本詩人協會の出發の根據をなしてゐるといふことができる。

この反省に基く一つの命題の下に、新しい詩人達は一夜にして結合した。今まで相容れなかつた各詩派の詩人達、具體的にいへば、「四季」「新領土」「歷程」「新技術」(舊VOU)「文藝汎論」その他の代表的詩人達。

これらの詩人達の即時的融合一致は、これらの人々が今日までにこの唯一の命題のために焦慮してきたかを示すものであつた<sup>182</sup>。

1941年1月30日、日比谷の産業會館に「多くの若い聴衆を集めて開催された」この「詩人祭」は、この日本詩人協會の「最初の第一聲、マニフェステ

エション」であった。開演の前から「多くの青年達が、待ちかねるやうに受付に殺倒して、受付の若い詩人たちを驚かせた」と村野は記す。「協會への新しい魅力や好奇心の他に、科学主義工業社の提供によるアトラクティブなポスタアが、宣傳効果を充分發揮したのかも知れない。」山雅房が用意した朗読詩用のテキストも配布された<sup>183</sup>。

山本和夫が開会の辞に「綱領」を読みあげ、第一部は、浅野晃と中野秀人の講演、「國民文學としての詩」と「詩人と新文化」につづいて詩の朗読。第二部は瀧口修造の講演、「人間的な技術としての詩」からはじまる。村野の記録ではこうである。

一人の最も確實な公衆を得ることが、日本の傳統的な最も洗練された詩の傳達法であり、精神の技術としての詩はそこに發足してゐる。日本の現代詩が、新しく民族的な血を通して發足し、新しい集團を公衆にしようとしてゐる時に、この根源の問題を忘れてはならない<sup>184</sup>。

つづく朗読の部は、最後に村野が「群讀詩」、「若い重役」を近藤東と朗読して終わり、村野が閉会の辞を述べた。「一人の退場者もない」詩人祭であった。「かくして日本詩人協會は、その夜にはじめて實際の行動的發足をした」<sup>185</sup>のである。

村野の「若い重役」は、3月号の『新領土』に掲載された。

- B まつたく夜は巨大なパラシウトだ  
 人造大理石の階段に躓くな  
 みんな しつかり文化の綱に掴まつてかへれ  
 倒れてはならぬ  
 倒れてはならぬ
- A 君らの若い肉體を  
 しばらく鐵の寢臺に横たへよ  
 再び 明日の花さく電話のために  
 ステンレスの光のために



- B 今日はずつた  
 民族の一つの段階はつた
- A 僕らもかへらう  
 ぢや失敬!
- B 失敬!<sup>186</sup>

この夜の「詩人祭」に、春山が参加したかどうか、村野の記述からは不明である。長谷川は「ニコニコしながら協會員の控室へ」あらわれた。しかし、松本学についての記述はない。

出席した菊島常二は、『新領土』4月号に、「詩人祭の朗讀」を寄せた。ただし、彼の関心は詩に「新生面を開拓すべき朗讀法に就ての研究が意外に閑却されてゐる」ことにあった。二三の例外をのぞいて、「最期の群讀も折角新しい試みではあつたが無味乾燥」<sup>187</sup>なものであった。

行く行くは作曲家の協力によつてオリジナルな伴奏も欲しいまた照明にも、ステージの装置にも考慮の餘地があるだらう。なんの工夫もない開放しのステージから小學生の讀み方式の朗讀が何等の反省もなしに繰返されてゐる間は、この無人境の開拓も覺束ないことだし、まして大衆の關心を呼び醒すなどといふことは到底考へられない<sup>188</sup>。

「詩人祭」の朗讀法のみを記す菊島が、べつの思いでいたことは明らかである。彼は、同号の「斷層」にこう書いている。

神々の小さな通路である斷層は  
 その誰かの甲高い號令の波紋をくぐり  
 圓心にすべての希みをかけてゐる人々に冷たく  
 光りの飛沫を浴びせ野を走る  
 光りの飛沫を浴びせ海へ走る<sup>189</sup>

菊島が不満をのべた詩の朗讀法はさらに磨かれてゆくであろう。そして、

また、わざわざ朗読会に足を運ばずとも、茶の間のラジオから声優たち、あるいは、詩人自らの朗読を聞くことができるようになるのである<sup>190</sup>。

## 26. 新文化 祭典のあとに

1941年4月号から『セルパン』を『新文化』と改題するにあたって、『セルパン』2月号で、大島は「編輯者の言葉」に記す。「西洋の事情やその知識を紹介するといふ本誌従來の任務をやめるのではない」がただ、「私は『セルパン』といふフランス語名は以前から好まないし、また徒らに物識りぶるところの編輯方針」よりも、「革新的にして建設的な編輯に邁進して、新日本の文化に役立つ雑誌にする為には、異國名ではびつたりしない」<sup>191</sup>のであった。ただし、読者から改題について異論があった。大島は、次号の「編輯者の言葉」に記す。

創刊以來、十年間、讀者に親しまれてある『セルパン』といふ誌名を『新文化』と改題するのだから、愛讀者のうちには、反對の意見をお持ちの方もあると思ふ。しかし誰にでも周知の誌名をやめて、未知の新しい誌名にせざるを得ない當編輯部の意圖するところをも、知つていただきたい<sup>192</sup>。

新しい編輯方針に沿った改題であるとはいえ、「新しい誌名にせざるを得ない」ことは、「周知」のことであった。

『英語研究』も4月号から表紙の「The Study of English」という副題を「The Eigo Kenkyu」と改めた。編輯者は「編集餘記」欄に、「本誌は今更申し上げるまでもなく『英語研究』でありまして、決して The Study of English ではありません。當局に對しましても初めから The Study of English なる雑誌は登録してあったものではないのです」<sup>193</sup>と記した。

『セルパン』の編輯長を更迭された春山は『新領土』の誌面強化のために力をそそぐが、彼が編輯を受けついだ1940年11月号は刊行日程が遅れて見送られ、さらに、以降も刊行は遅れがちであった。そして、詩誌『新領土』は、改題することもなく、日本詩人協会が主催する「詩人祭」で明けたこの年、

1941年5月号をもって終刊となった。

終刊の経過については次稿で詳細に検討するが、そのひとつに、誌面づくりに必要な海外からの情報の制約があったことは見逃せない。文学関係の図書はもちろん新聞雑誌類の輸入はすでに困窮を深めていた。同時に、「内閣情報部」を改組強化した「情報局」による統制が、さらに追い打ちをかけたのである。

かつて日支事変の直後に、内閣情報委員会から昇格して「愛国行進曲」の募集を行った内閣情報部<sup>194</sup>は、新体制と軌を一にして、すでに、情報の一元化をめざし強化されつつあった。1940年秋に日本詩人協会設立の斡旋をしたのが、「内閣情報部、内務省圖書課」であった。内務省警保局の図書課が掌握する業務のひとつが、従前から、検閲であった。「情報局」は、12月6日に公布施行された情報局管制勅令<sup>195</sup>によって設置された。内務省警保局を含む5省の情報統制に関わる事務部門はここに移管統合<sup>196</sup>されて、内閣総理大臣の管理に属する組織となった。ただし、内務省警保局図書課は情報局に完全に統合されなかった。警保局図書課は、同日、検閲課<sup>197</sup>となった。情報局第四部第一課は、国家総動員法第二十条に関わる検閲を管掌することとされたが、「当該員は一方に於て内務省警保局検閲課員として」これを管掌<sup>198</sup>することになったのである。内務省はまた、新聞法と出版法による取締りと処分権をゆずらなかつた。しかし、いずれにせよ、統制は検閲と相まって、万全の体勢を整えたのである。

第二十条 政府ハ戦時ニ際シ国家総動員上必要アルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ新聞紙其ノ他ノ出版物ノ掲載ニ付制限又ハ禁止ヲ為スコトヲ得

2 政府ハ前項ノ制限又ハ禁止ニ違反シタル新聞紙其ノ他ノ出版物ニシテ国家総動員上支障アルモノノ発売及頒布ヲ禁止シ之ヲ差押フルコトヲ得<sup>199</sup>。

洋書輸入の統制はどのように進められたか。情報局設置直後に作成された幹部職員のための内部資料、12月付「情報局ノ組織ト機能」によれば、情報局第五部第三課の事務部門のひとつが「図書輸入統制」である。同課の分掌

する「文壇新体制の強化」「詩壇、歌壇の新体制促進」「国民詩の建設助成」とならんで、「図書輸入審査協議会の件」が「今後実施すべく計画している」<sup>200</sup>事項とされていた。

大島豊を編集長とする『セルパン』1941年3月号は、特輯「洋書の輸入統制と文化」<sup>201</sup>を配した。新居格「輸入審査の要點」によれば、従来大蔵省為替局で取り扱っていた外国図書の許可事務は廃止され、情報局第五部に設置された図書輸入審査協議会が今後あらゆる洋書の輸入許可を審議決定することになった<sup>202</sup>。新居によれば、輸入審査協議会の「許可標準表」は三つに分類された。輸入可能のものは「自然科学並に實用の學に関するもので、要約すれば国防科學振興に役立つもの」であり、「一般の輸入は不可とするが、専門研究機関に限り可能とするものの中に、政治、外交、社會問題、時事問題、經濟、財政、新聞その他」があり、小説および詩その他は輸入不可とされた。「小説及び詩は不急不要と烙印を押された」<sup>203</sup>のである。しかも、雑誌はすでに入らなくなっていた。海外文学書の「早狀状態」を憂慮する新居は、さらに、「海外時事を知る上に、海外諸雑誌が、これまでに殆んど輸入されなかつたのは不便だつた」<sup>204</sup>と記すのを忘れない。阿部眞之助「無形の文化力」によれば、前年の暮れに「丸善へ洋雑誌の注文に行つて、にべもなく拒はられた」のである。もっとも、「工業や理科學に関する雑誌類なら、絶対に不可能でないといふのだつた」<sup>205</sup>。

新居は記している。

せめて原著でよめなくとも、ある程度まで他國の新著なり、雑誌新聞なりを翻譯でもよめるやうにして貰ひたいものである。

同号の「編輯者の言葉」に、大島もまた、従來の編集方針を維持する決意を述べる。

本誌の誌名を來月號から、『新文化』としても、従來の西洋事情紹介の仕事をやめるのではない。洋書入手の困難な今日、本誌は益々西洋に就いての良い紹介記事を掲載して、讀者の良識に供したいと思つてゐる<sup>206</sup>。

3月15日号『英語青年』で、福原もまた、この間の状況に触れている。

英米から新刊の書ばかりか、雑誌まで来ないやうになりさうである。今のところは、實にわづかの新刊と、後れながらも雑誌類は到来してゐる。今までは餘りそれが多いので、買つても讀まなかつたり、來ても記事の標題だけ眺めてすませたりしたが、これからは、まるで女中が月後れの婦人雑誌を買つて來てむさぼり讀むやうに、偶々手に入つた一冊の雑誌にがつがつ喰ひつくやうになるかも知れない<sup>207</sup>。

情報が涸渇するなかで、『新文化』となつても春山編輯長以来の「雄鳥通信」はつづけられた。しかし、同時に、配給制による用紙不足が誌面づくりに困難をもたらした。太平洋戦争がはじまった翌年、1942年2月号「編輯者の言葉」である。

大戦争をしてゐるのだから、用紙の節約は當然のことだが、官廳関係の雑誌や、科學とか時局とかいふ名稱を冠した雑誌であれば、その内容の如何に拘らず、創刊されるに反し、曾つて反逆思想なるマルクシズムが横行した當時も、時流に超然としてただ讀者の精神的教養に盡力して來た雑誌が減頁を豫儀なくされてゐる現状に對して、私は實に不満であることを附記する<sup>208</sup>。

これが、編輯長としての大島の最後の筆となつた。

3月号から編輯長は十返一<sup>209</sup>となつた。彼は「編輯後記」に、「編輯スタッフが一新することになつた」と告げ、「本誌は若き世代の知識階級とともに歩み、ともに皇國の理想を實踐したいと思ふ」<sup>210</sup>と記した。そして、この号から、「雄鳥通信」は消えた。新聞雑誌は届いていなかったか、涸渇していたか、あるいは、収集の努力を放棄したのである。その後、「切抜帳」、ついで「海外抄」が海外の状況を伝えることはあつたが、その内容の出所は記されておらず、おそらく間接的に得た何らかの情報をもとにした、いわゆるゴ

シップの類であった。次号、4月号からは、大島時代をくぐりぬけて小さくつづいていた新刊紹介欄も、「廣告税の関係から」廃止された<sup>211</sup>。

『新文化』1942年5月号は特輯を「學生の文化」とし、巻頭言「決戦下の學生」をおいた。

もはや學生は將來のためにのみ準備して寄食する存在ではない。民族の一員として現在、連帯責任を負ふ者だ。そして大東亞の文化的建設なる使命が今、學生に課せられてゐる。曾ての「學生狩り」の汚名に相應する行動は、微塵も繰返さるべきでない。また有名無實の各學校報國團の現状を眞にその名にふさはしいものに改革するのは、學生自身の自覺による以外にないことを悟らなくてはならないのである<sup>212</sup>。

この堂々たる巻頭言とは裏腹に、十返は、本音を隠すことはできない。彼は「編輯後記」に記す。「社會人は、もう少し今日の學生の立場を理解すべきではあるまいか」と。「今日では彼等が學生であつた時のやうに時代は呑氣でなくそれだけ學生の立場が複雑化してゐる事にたいして、もつと思ひやつてもいいと思ふ」<sup>213</sup>のである。

だが、鮎川はすでに『新文化』を読んではいなかったであろう。彼にとっては「學生狩り」はすでに思い出の一齣であつた。彼らは、やがて、卒業繰上措置によって學校を追われ、戦地へ駆りだされようとしていたのである。

他方、用紙不足はさらに深刻となつた。8月号は、「『新文化』は若き知識人の新雑誌として益々その聲價をたかめつつ」あるが、「用紙統制のため」予約者以外には手に入らぬことになつたと告げた。方法は、直接に代金を振り込んで購読するか、書店で予約することになつた<sup>214</sup>のである。その制約のなかで、なお、十返は若い世代に訴えかけようとしていた。そのひとつが、11月号の、三枝音吉・船山信一・樺俊雄による鼎談「現代の思想」である。編輯長は「編輯後記」に、「英米思想文化の打破が叫ばれるや、早くも我々は思想戦にも勝利せりといふやうなことを言つて酔つてゐる」傾向を批判しつつ、この鼎談の意図について、こう記した。

本號の三枝、樺、船山氏による思想鼎談は、かかる思想界の際物便乗に對して純生なる立場を明らかにすることをもつて成されたのである。我々は文化の領野に於ける一切の闇取引的現象に抗議することをもつて、思想文化の報國は警為されると信じてゐるものである。眞摯着實なる三氏の膝をまじえての論議は、多くの若き人々に聽いて頂きたいものであり、その意義は少なくないと思ふ<sup>215</sup>。

後年、十返が記すところによれば、この鼎談が「内閣情報局から睨まれはじめで、逗子八郎というペン・ネームをもつI課長のおんぼえがめでたくなつてしまった」<sup>216</sup>のである。歌人逗子八郎、すなわち井上司郎は、民間人から情報局第五部第三課の情報官となり、やがて、この年5月26日に結成された「日本文学報国会」<sup>217</sup>の推進力の役目をはたし、「その功、顕著なるをもって」第五部第三課長に栄進した人物<sup>218</sup>であった。「I課長」の存在は文芸界に轟いており、十返の記述は十分に信頼できる。彼に睨まれれば、編輯長の運命はほぼ決まったといふことができる。

翌年1943年2月号から、『新文化』の頁はさらに薄くなった。「編輯後記」がいうように、「日本出版文化協會は、この紀元節をもつて發展的解消し、愈々日本出版會として新しく出發することになつた」<sup>219</sup>からである。日本出版會の使命のひとつが用紙のさらなる削減であり、その背景にあったのは、国家總動員法にもとづく出版業務令を受けた、統制と検閲の強化であった<sup>220</sup>。

もちろん、『新文化』は総合文化雑誌としての役割を担っていた。時事的な記事だけでなく、従前どおり、詩や短歌も掲載されていた。そして、文芸誌としての要素は、1943年6月号から、新たな編輯長、野田宇太郎の下に強く打ちだされることになった。「編輯後記」によれば、編集者が変わったので「内容も一變」した。「然し、わが國の青年知識層におくる高度の目的には變りない」。野田はつづける。「尚、編輯主旨を敷衍させていただくなら、如何なる場合でも飽迄も情操を忘れず、美の精神をとどめることに留意した。この二つのものは文化を豊かに培ふ絶対不可缺のものであるからだ」と。配給される「更紙は印刷紙に較べて質ももろいし、一年もたてば變色する」ものである。しかし、「この弱い紙にいよいよ貴重な文化の文字を止めねばな

らない」<sup>221</sup>のである。

たしかに、美の精神を求める編輯方針によって誌面は充実した。村野が「梅」<sup>222</sup>を寄せたのが、翌1944年2月号である。これは、のち、1945年1月の詩集『故園の堇』に収められることになる。

一部の際もない完璧な作品である。断片的な引用は控えねばならない。

ひそやかな障子に  
 梅の古木が影をおとし  
 花の匂が部屋の中へ波だつてくる  
 にはい立つこの家の古い垂木たるきと柱たち  
 それから 遠い父祖たちの座  
 そこに私は  
 いま現代の肉體をおき  
 しづかな思考にしづんである

古来の伝統に身を委ねて、詩人は伝統が現在に及んでいることを思う。「肉體」と「思考」の対立は、「現代」と、その「肉體」を包摂する「永遠」との対決となってゆく。「しづかな思考」すなわち瞑想が帰着するところは、「永遠」の相である。瞑想から詩人が獲得するのは、一種の決意である。

ああ これはまぎれなき  
 われら永遠の面影だ  
 誰がこれを攪亂し  
 誰がこれを欺き奪とらうとするのだ

私の息づきは しだいに荒々しく  
 梅の香はいよいよ冴えて  
 清らかないかり瞋怒のやうだ

では、「われら永遠の面影」を攪亂し、欺き、破壊しようとするのは誰か。



それは、必ずしも敵国ではない。また、冴えわたる「清らかな<sup>いかり</sup>瞋怒」とは何か。

『故園の堇』の「後書」、「祖國への郷愁 現代詩再建に関する覺書」<sup>223</sup>を読めば、それが、詩人の肉体に刻まれていた欧米の精神との訣別への決意に支えられていることに気づくのである。

破れそうな紙に、詩人の任務について、村野はいう。

今日の祖國を愛し、なほ祖國永遠の道を思ふもの、すなはち眞に祖國を愛する詩人の任務は、あらゆる國民をして死を以て祖國の難におもむかしめる力と勇氣とを與へる詩の道を、今日以後嚴として大東亞の上に君臨する日本國民精神の母胎たるべき眞正なる詩の道の中に見出さなければならぬ。

語り口は、あまりにも多くの任務を詩人に負わせようとして曖昧である。だが、詩人の決意は固い。

或る詩人は、今日においては詩人は沈黙するか、然らずんば喇叭手となるべきであると力説したが、このやうなハツタリの思考は決して正當ではなく、そのやうに二種類の詩人を存在させるその事が藝術の上において既に正統ではない。今日の詩人は悉く、純正な詩の世界に立つ喇叭手であることを要求されねばならないのである<sup>224</sup>。

詩人が喇叭手でありながら、かつ、その詩が純正であること。プロパガンダと純粹詩の統一という困難な使命を、村野は実践しようとしていたのである。しかも、それができたのである。

たとえば、『故園の堇』の「撃滅の賦」詩篇のひとつ、「方眼紙の海 工場のための朗讀詩」<sup>225</sup>である。

舞台は村野が運営する軍需工場の光景から採られたのであろう。夜が更けたにもかかわらず、「第三工場から／二百五十阬爆彈の／彈尾の板金をたたく音が まだきこえてくる」。250キロ爆彈は早朝にも献納され、やがて大砲

に装填されるであろう。徹夜の作業がつづいている。製図士は「めつきり秋  
めいてきた電燈を / ぐつと低くひき下げる」。

あたりには誰もゐない  
勇んで應召して行つた仲間の机の上が  
きれいに片付いてゐる

彼は作業をはじめ。以下、長い引用となる。その完璧さを見るためである。

おれは また製圖盤にのしかかり  
水色に澄んだ光の中に頭を浸す  
けふは心がしいんとして  
體がしまるやうだ  
息をころし  
たつぷりと インクをふくませて  
すうつ と一線を引く  
青い 青い方眼紙の上を  
鐵の烏口がすべつてゆく  
じつと見つめてゐると  
たちまち おれは  
渺々たる青海原のただ中にゐるやうだ  
その上を烏口は  
白波を蹴だててすすむ  
小さい 光る鋼鐵の船だ  
後から 後から  
長い影をひき 波かむつて  
水平の彼方に消えてゆく

烏口が描きだすのは実際は爆弾の設計図だが、それは「勇んで應召して行つた仲間」を乗せた船の姿と重なってくるのだ。設計士の烏口の動きをたどる

詩人の視線はあくまでも詩人のものである。しかしながら、詩人は設計士の肩越しに囁きかけるのだ。

ああ この小さい鋼の船  
 だが これだつて  
 これだつて 彼奴米英の横腹に突き刺さらないと誰が言へる  
 誰が言へる！  
 思はずおれは かう自分に言つてきかせる  
 すると 何といふ情けないことだ  
 目の前が ぼんやりと涙で曇つてくるのだ  
 一瞬 茫々たる霧が  
 方眼紙の海を蔽ふてくる

喇叭手は、それでもなお、詩人である。しかし、最後の二行で詩人はもう一つの使命にたち帰る。涙でかすむ方眼紙に「茫々たる霧」が覆うと。

しかしながら、設計士はこのとき睡魔ともたたかっていたのである。最終の連である。

くそ くそ  
 また眠氣がやつてきた  
 おれは 再び きつと烏口をとり直す  
 外はもう 明方ちかく  
 戸をもる風が冷え冷えしてきた  
 あちらの作業場からは  
 さぶに馬力をかけ出した  
 たのもしい仲間の槌音が  
 びんびんと  
 新しい朝の力で ひびいてくる

設計士の耳に響く「さぶ」とは、わたしたちには不明である。ただし、それ

は工場の仲間には直ちに共有される具体的な「機械」の音である。詩人は設計士となり、工場の仲間となり、「彼奴米英」との戦いを歌いあげるのである。末尾に「朗讀詩 AK より放送」と記されている。この「方眼紙の海」は、副題にいう「工場のための朗讀詩」であつたばかりか、銃後を戦う国民へ放送をとおして広く訴えかける内容をもち、新文化を背景としながら、かつ、それを越える、傑作であつたのだ。書かれた時期は不明だが、JOAKの放送記録によれば、詩人自らの最初の朗讀は、1943年9月12日の朝、「愛国詩」の時間であつた<sup>226</sup>。コクトオなら、「日本は、詩人を尊敬することをまだ忘れずにいる唯一の國のやうに思はれる」と語るであろう。

「方眼紙の海」は、詩人と喇叭手との任務が、二つながら見事に果たされた例である。詩人の連想は想像力によって無理なく自然に運ばれてゆく。これは、象徴詩でもなく、サタイアでもない。愛国詩であつて、しかも、それを越えて純粹である。この素直な詩の世界はどこに由来するのであろうか。

もういちど、巻末の「祖國への郷愁 現代詩再建に関する覺書」に戻らなければならない。

村野は記す。

先づわれわれは、われわれが今日まで追求してきた現代詩の詩文化なるものの根源を、冷靜に、しかも謙讓に検討して見なければならない。われわれの現代詩は、自由詩として出發してから既に七十年を經過した。そしてその間、それは實に驚くべき程詩の倫理と様式とを變へた。他の文學の分野において詩ほど敏感に、又屢々その相貌を改變したものは、他にその類を見ないであらう。これは詩人の光榮でもあれば又不名譽でもあつた。そしてそれは悉く歐羅巴の文學思潮によるものであつたと言つていい。われわれは回想する。象徴主義、浪漫主義、表現主義、未來派、寫象主義、即物主義、超現實主義、等々。十指を屈してもなほ足りないであらう。これらすべては一應夫々その理念を異にするやうには見えるが、殆どすべてが、個人主義的な自己把握を唯一最高の任務としてゐるといふ點で一貫してゐるといふことが出来るであらう<sup>227</sup>。

詩人は、わが国の近代詩歴史を総決算することによって「近代の超克」をなし遂げたのである。そこから導かれるのは、「歐羅巴の文學思潮」の超克であった。

今日からの詩人はまづこの反省から出発することによつて、もはや搖がぬ詩の理念を獲得すべきであつて、あらゆる國民詩の運動も、この國際的コースより國家的コースへの明確で確乎たる覺醒から出発するものでなければならぬであらう<sup>228</sup>。

かくして、『新領土』の嘗みもまた、明確に、否定されたのである。

村野の「梅」を掲載した翌月、1944年3月号は、巻頭に社長長谷川の「第一書房廢業御挨拶」<sup>229</sup>を掲載して、突然、終刊となった。野田の「後記」である。

四月號の準備も既に出來てゐるのだが、事實上第一書房が仕事の面で働けるのは三月限りであるので、これ以上新文化としての仕事を進めることは出來ないのである。社の意嚮としては、現在東京に廣範な詩の雑誌がないので日本文學のために、本誌を捧げようといふことになり私も及ばずながら微力をつくしてきたのであるが、事態がここにいたつては残念ながら私の力では及び得ないので諦めて私は私なりに新發足をすることにした<sup>230</sup>。

『新文化』は『セルパン』を引き継いで、通巻第158号で終刊となった。値段は30銭。1939年3月号以来変わらなかった。このとき240頁であったが、終刊1944年3月号は66頁となっていた。『文藝汎論』は2月号をもって、終刊となっていた。他方、『英語研究』は、この年3月号で終刊となり、『英語青年』4月号に合併された。同誌はかつて月に二回刊行されていたが、すでに月刊となっていた。

『新文化』が終刊となる頃、戦地にあった鮎川は、1944年2月18日、マラリアに罹りのち小康をえたが、3月13日に吐血した。15日、内地送還となつ

た彼は、ニューギニア島シグリの野戦病院に收容された。ついで、スマトラ島のメダン、マレー半島のジョホール、さらに、マニラの陸軍病院へと病院船で移送された。内地送還となって二ヶ月後、5月15日、鮎川は病院船でインドネシアのスマトラ島、ベラワン港を出港した。ちょうど一年前、彼が到着した港であった。サイゴンを経てマニラに到着したのが5月26日。ケソン陸軍病院に收容された。風呂敷包ひとつを持ってマニラを発った鮎川を運ぶ病院船は東京湾汽船の橘丸とか菊丸を改造したような小さな船であった。船は、台湾の基隆に二泊し、B 26の最初の九州爆撃があった門司港に寄港し、6月18日、大阪港に到着した。彼が大阪陸軍病院に收容されたのはその日である<sup>231</sup>。「南方の戦況が日に日に悪化していくなかを、天の助けで、うまく間隙をぬい、辛うじて内地にたどり着くことができた運命」<sup>232</sup>の船旅であった。病院と船の移送を含めて、入院から始まり大阪港に上陸するまで、鮎川の「戦争下の旅」は三ヶ月である。平時なら、定期客船でロンドンと横浜を二往復ができる期間であった。また、その間に、コクトオは世界一周の旅を果たすことができたのであった。

## 27. 「病院船日誌」抄

戦争を呪いながら  
 かれは死んでいつた  
 東支那海の夜を走る病院船の一室で  
 あらゆる神の報酬を拒み  
 かれは永遠に死んでいつた

(ああ人間性よ……  
 この美しい兵士は  
 再び生きかえることはないだろう)

どこかとおい國では  
 かれの崇高な死が  
 金の縁とりをした書物のなかに閉じこめられて

そのうえに低い祈りの聲と  
やさしい女のひとのおかれている<sup>233</sup>

## 28. オーデンの新領土

オーデンたちは『新領土』の詩人たちが知らぬまにわが国をかすめて通過した。わずかな詩と動向を伝える記事をのぞいて、二人とわが国をつなぐ唯一の接点は彼らが乗った船である。戦時に大砲を備えて軍隊輸送にあたったカナダの*Empress of Asia* は、1942年2月5日、シンガポール沖でわが国の急降下爆撃機三機の攻撃を受けて沈没<sup>234</sup>した。やがて、鮎川は大学三年生となり、最終学年をむかえる。

ヨーロッパからスエズ運河経由で藤村を乗せた榛名丸は、陸軍の輸送船としてフィリピン作戦にも参加していたが、1942年7月7日、御前崎灯台付近で座礁し、積荷の米と砂糖を満載したまま沈没した<sup>235</sup>。ビルマの戦場で森川が病死したのは、翌月、8月13日であった。

コクトオとチャップリンを乗せて横浜を出港したアメリカ船プレジデント・クーリッジ号もまたのちに徴用された。ソロモン群島激戦の頃、1942年10月26日、ガダルカナル島の南約600哩エスピリツ・サント島ルーガンヴィル港近くで、友軍アメリカの機雷に触れて沈没した<sup>236</sup>。鮎川が入営した月のことである。

翌1943年4月22日、鮎川が宇品港から向かったのはスマトラ島であった。山本五十六の死は一月遅れて、5月21日午後3時に大本営から発表された<sup>237</sup>。その秋9月12日の番組「愛国詩」に村野の「方眼紙の海」が朗読されてのち、21日早朝、コクトオをシンガポールから香港まで運んだ鹿島丸は、台湾からシンガポールへ向けて航行中、仏印沖でアメリカ潜水艦の魚雷を受けて、沈没した<sup>238</sup>。中桐雅夫、すなわち白神鑛一著『海軍の父 山本五十六元帥』は10月30日に発行された。

アルゼンチンの国際ペンクラブに出席する藤村とブラジルに向かう人々を乗せたリオ・デ・ジャネイロ丸は特設潜水母艦となっていたが、1944年2月11日、トラック群島のウマン島沖で、アメリカ機の攻撃を受け炎上し、沈没した<sup>239</sup>。鮎川が大阪陸軍病院から金沢陸軍病院に収容されたのが、7月11日

である。そして、8月21日、敦賀陸軍病院に移され、同日、退院となり同時に兵役を解除された<sup>240</sup>。そして、福井県三方郡の傷痍軍人療養所に入所する。のちに「戦中手記」となる文章を書き始めるのが、翌年、1945年2月頃からである。

村野の『故園の堇』はすでに発行されていた。著者略歴に「日本文學報國會詩部會常任幹事／日本詩曲協盟幹事／日本小國民文化協會員」とされたこの詩集を手にする機会と、そして手にする気があったとすれば、鮎川はその「後書」に、『新領土』の精神がこの地に失われていたことを、あらためて、確認したのであろう。

オーデンの「一九三九年・九月」を読んでから7年後、1947年5月3日に新憲法が制定され、デモクラシーによる国造りがはじまった。その5月30日付、鮎川の「アメリカ」である。

灯りは消されてはならない  
 音楽は絶え間なく弾奏されねばならぬ  
 「アメリカ」  
 僕は突如白熱する  
 僕はせきこみ調子づく<sup>241</sup>

詩人は、敗戦後の「虚無と絶望」から立ちあがろうとして「白熱する」のである。アメリカは帝国主義のアメリカではなく、「民主主義」<sup>デモクラシー</sup>の国であった。「新体制」がことばでなく現実の体制となる年、1940年にとどいたオーデンのメッセージは、いま、日本の再生を鼓舞し、鮎川の声と重なるのである。「スペイン」を書いたオーデンの転向は問題ではない。転向したのは、軍国主義から民主主義国へと、一挙に、方向を転じた敗戦後のわが国であった。

ただし、「一九三九年・九月」には、「虚無と絶望」を唄った「悲劇におわった三〇年代を飾るにふさわしい」<sup>242</sup>という読みとは対照的なメッセージを読みとることが可能であった。

「我々は互に愛し合はねばならぬ（We must love one another）」 「愛」は「当局」や「国家」を超えて、「帝国主義」や「國際的な不正」に立ち向



かうことができる 「でなければ死ぬよりほかにはない (or die)」のだ。アメリカからの第一報は、帝国主義への警告であり、さらなる「連帯」を呼びかけるもの、と解することもできるのだ。ここには、「歴史は打ち負かされた者に / 悲しみの言葉を送り得ても、その者を許すことも助けることも出来ないのだ」と、歴史への参加を呼びかけた1937年の「スペイン」の結びの二行さえ、なおも響かせていたことになる。

二つの詩はいずれも詩集 *Another Time* に “Spain 1937” “September I 1939” として収録された。しかし、「スペイン」はやがて、その最後の二行の故に、オーデン自身によって抹殺された。嘘を書いた、というのがその理由であった。そして、「一九三九年・九月」もまた、その一行の故に抹殺されることになるのだ。

オーデンは “We must love one another or die” を読みなおして、これは嘘だ、と思う。人はいずれは死ぬものだ。そこで、彼は “We must love one another and die” と書き換えた。それでも納得がいかないオーデンは、この一行を含む一連を削除した。大戦終結まぢか、1945年4月の *The Collected Poetry* 所収、“September I, 1939” がそれである。そして、この作品は、“Spain 1937” とともに、1966年版 *Collected Shorter Poems* には収録されなかった。詩人自らが作品を抹殺したのである。この詩が「手の施しようもないほどの不誠実で汚れている」から<sup>243</sup>であった。

1967年、長田弘は「愛 一九三〇年代への一視角」で、「スペイン」のみならず「我々は互に愛し合はねばならぬ、でなければ死ぬよりほかにはない」という詩行を含む作品群が、詩人の手で抹殺されたことに激しく抗議する。

なぜオーデンはこれらの、かれ自身が参加し、決断と錯誤のディアレクテークを生きてきた鮮明な言葉を、その経験の総和から放棄し、否定したのか？ それはオーデンじしんの手で果たされた偽証なのか？ そして何よりも、いま、これら放逐されたわれわれの言葉たちはいったいどこに存在していると、わたしたちはいうべきなのか、これらの詩がわたしたちの歴史の記憶にくっきりと刻印されてきている以上？ (傍点原文のまま)<sup>244</sup>

長田のいらだちは、オーデンの詩行を「わたしたちの歴史」に刻みこんだところから生まれていた。

同じことは、いいだ・ももについてもあてはまる。1968年版、深瀬基寛訳『オーデン詩集』に解説「私たちのオーデン」を寄せ、その「歴史からの引きさがり」<sup>245</sup>を指摘した彼は、翌1969年、新たな評論「オーデンの立ちすくみということ」では、「彼自らの不在証明工作、証拠湮滅工作」<sup>246</sup>と呼ぶ。いいだもまた、「私たちの」オーデンに裏切られたのである。これら二つの書き物は、1969年7月、『われらの革命』に収録された。

この頃の政治情況は、まだ、わたしたちの記憶に残っていよう。アメリカはベトナム戦争をめぐる「いちごの季節」にあり、パリでも学生たちは体制を打破しようとしていた。そして、わが国にあっては、六〇年安保闘争の挫折の後、七〇年へ向かってふたたび高揚していたのだ。安保条約自動延長が否かは、1970年、万国博覧会のさなかの6月23日にかかっていた。それは、オーデンが歌った「国際的な不正」を体現する「帝国主義の顔」をもつ、アメリカとの戦いをも意味していた。このとき、「わたしたちの歴史」を拓くべき「私たちの」そのオーデンが、「われらの革命」を前にして、裏切ったのである。

1970年10月、鮎川の「一九三〇年代の射程 W・H・オーデンを中心に」は、彼らのいらだちに応えたものであった。鮎川は、オーデンの別の作品から結びの二行、“No one has yet believed or liked a lie, / Another time has other lives to live”を引用して、記す。

「スペイン一九三七年」「一九三九年九月一日」を書いたオーデンの第一の「自己」と、それらを否定した第二の「自己」との関係は、どちらが偽であるといったものではなく、あえていえば、第二の「自己」は、はじめから第一の「自己」に含まれていたことを、この結句の二行は示している<sup>247</sup>。

鮎川からすれば、いいだや長田は、オーデンの第一の自己を信じ、その第二

の自己によって裏切られたにすぎない。「誰も嘘を信じたり好んだりする人はいない/かの時にはかの生き方があり、またの時にはまたの生き方がある」<sup>248</sup>のだ。中桐の訳である。

ここで、鮎川の政治的姿勢の是非を問うのではない。問題は、この、彼の覚めた眼である。「現象の廻轉するベルト」に翻弄されてきた鮎川にとって、なおも、オーデンに転向と呼ぶべきものがあるとすれば、それは「あくまでも反省的な「自己」の問題」<sup>249</sup>であった。『新領土』が直面したような、また『セルパン』や鮎川たちの同人誌も対応せざるをえなかった、検閲や、また、思想への弾圧があったためではない。自らの判断であった。

丸善が「海外新聞雑誌見本展示会」を再開し翌年度の予約を募ったのが、敗戦から5年後、1950年の秋である。展示会は東京本店で10月25日から11月9日に渡って開催され、ついで、各支店で開催された<sup>250</sup>。

## 注

- 1 本稿は、拙稿「鮎川信夫と『新領土』(その1)」『言語文化』第2巻第4号(2000年3月)、491-532、「鮎川信夫と『新領土』(その2)」『言語文化』第3巻第4号(2001年3月)、497-554、「鮎川信夫と『新領土』(その3)」『言語文化』第4巻第1号(2001年8月)、89-178、および、「鮎川信夫と『新領土』(その4)」『言語文化』第5巻第2号(2002年12月)、231-274を受けている。以下、それぞれ「その1」「その2」「その3」「その4」と略記する。
- 2 拙稿「その3」、118を参照。
- 3 鮎川信夫「花 亞細亞の一部」『LUNA』第12輯(1938年4月)、28、「頌「亞細亞」の一部」『LUNA』第13輯(1938年5月)、10、「河」『新領土』第3巻第13号(1938年5月)、45。「花」の末尾に「38,3.9」、「頌」の末尾に「4,3」と記載。「河」は、末尾に「亞細亞」の一部」と記載。これは、3月26日に『新領土』編輯部に送付された。拙稿「その3」、101-102を参照。
- 4 Christopher Isherwood, *Christopher and His Kind, 1929-1939* (Farrar, Straus, Giroux, 1976), pp. 309-311; Edward Mendelson, "Textual Notes [to *Journey to a War*]," in *The Complete Works of W. H. Auden: Prose and Travel Books in Prose and Verse*, Vol. 1: 1926-1938, ed. Edward Mendelson (Princeton University Press, c1996), p. [822]. 以下、

旅程に関する本稿の記述はこれら二つの書に基づく。

- 5 堀口大學訳ジャン・コクトオ『僕の初旅世界一周』（第一書房、1937年5月）31頁。以下のコクトオの旅程は、この書による。
- 6 淀川長治『私のチャップリン』（PHP、1977年）25頁。淀川のいう「昭和十一年六月」（25頁）は「五月」の誤り。なお、チャップリンの来日は二度目。彼が政府の賓客として華やかに初の来日をしたのは4年前であった。神戸から鉄道で東京に到着した翌日、1932年5月15日、相撲観戦を終えるころ、犬飼毅が暗殺されたという「怖ろしい知らせ」をうける。彼はその翌日に首相官邸で晚餐をともにすることになっていたのである。参照、飯島正譚チャールス・チャプリン「日本を通過する」『セルパン』第36号（1934年2月）50-51。この時、帝国ホテルを定宿としていた正宗白鳥は、「この喜劇役者の不愛想な非社会的態度をおのずから持っているのを、興味をもってちらちら」見ていた。参照、正宗白鳥『文壇五十年』（河出書房、1954年）105頁。
- 7 参照、小松清訳ジャン・コクトオ「ペン・クラブに於ける挨拶」『セルパン』第65号（1936年7月）78-79。なお、コクトオの日本滞在日程に関する事項は、同号『セルパン』の、以下の記事による。堀口大學「コクトオ口氣」、林芙美子「コクトオに會ふ」、春山行夫「ジャン・コクトオイズム」（74-79；80-81；82-87）。
- 8 「東京詩人俱樂部」「文化の動き」『セルパン』第65号（1936年7月）119。
- 9 堀口大學「コクトオ口氣」『セルパン』第65号（1936年7月）76。
- 10 [訳者後書]堀口大學訳コクトオ「日本の印象」『セルパン』第69号（1936年11月）146。
- 11 堀口大學訳ジャン・コクトオ『僕の初旅 世界一周』（第一書房、1937年5月20日）219-220頁。
- 12 「國際ペン俱樂部へ代表派遣」「學芸ニュース」『セルパン』第66号（1936年8月）137。
- 13 島崎藤村『巡禮』（岩波書店、1940年2月）2頁、および、島崎藤村「第十四回國際ペン大会報告（於1937年2月日本ペン・クラブ）」『島崎藤村全集』第28巻（筑摩書房、1957年）273頁。船名「リオ・デ・ジャネイロ丸」の表記は、これらによる。また、以下、藤村の旅程については、これらに基づく。
- 14 島崎藤村「第十四回國際ペン大会報告」、269頁。これは、日本ペン・クラブ『会報』第3号（1937年3月4日）に拠ったもの。テキストは現代表記にされている。
- 15 「20世紀時刻表歴史館」（<http://www.tt-museum.jp/>）館長、曾我誉旨生氏のご教示によれば、日本郵船榛名丸の1等と2等の船客は、国内の港を船によらず鉄道で移動するばあいは、乗車券は無料であった。また、欧州からの船賃は国内のどの目的地であれ同一運賃であった。オーデンたちが神戸港で下船したのもそのためであった。なお、1930年10月に登場した特急「ツバメ」は、当初、東京から大阪まで8時間20分、神戸まで9時間であったが、丹那トンネルの開通とともにダイ

- ヤが改訂され、1934年12月から東京大阪間は20分短縮されて8時間となった。参照、原田勝正『鉄道』[産業の昭和社會史8](日本經濟評論社、1988年)、20、および、44頁。
- 16 島崎藤村「第十四回國際ペン大会報告」、269-270頁。なお、後に刊行された島崎藤村『巡禮』、340頁では、藤村は帰途、日本を間近にして秘かに思う。「一方には國際聯盟からも退きながら、一方には文化的には諸外國と手を握らうとすることそれ自身すでに困難があつて、せつかくわたしたちも託されて行つたことながら、日本紀元二千六百年を期し萬國ペン大會を東京に開きたいとの件も、どうあらうかと案じられた」(傍点引用者)と。この一節は明らかに1937年2月の「第十四回國際ペン大会報告」をテキストして書きなおされたもの。
  - 17 野口富士男「日本ペンクラブ三十年史」日本ペンクラブ編『日本ペンクラブ三十年史』(日本ペンクラブ、1967年)、115頁。
  - 18 拙稿「その2」、519を参照。
  - 19 [喜安雄太郎]「國際ペンクラブ東京大會中止」「片々録」『英語青年』第79巻第9号(1938年8月1日)、284。
  - 20 拙稿「その2」、519を参照。8月、内閣情報部は菊池寛、久米正雄らを招いて「ペンの戦士」を漢口の最前線へ送る計画を発表、ただちに22名を決定した。翌月11日、従軍作家陸軍部隊が漢口へ向けて東京駅を出発、14日、従軍作家海軍部隊も羽田から大陸へ出発。ペンの戦士22名は、和田利夫『昭和文芸院瑣末記』(筑摩書房、1994年)、107頁によれば、陸軍側：浅野晃、尾崎士郎、川口松太郎、片岡鉄兵、岸田国土、久米正雄、佐藤惣之助、白井喬二、滝井孝作、富沢有為男、中谷孝雄、丹羽文雄、林芙美子、窪田久弥。海軍側：菊池寛、北村小松、小島政二郎、佐藤春夫、杉山平助、浜本浩、吉川英治、吉屋信子。
  - 21 R.F.[福原麟太郎]「英學時評」「片々録」『英語青年』第79巻第9号(1938年8月1日)、284。
  - 22 清澤冽「國際ペン俱樂部苦戦記」『中央公論』第53巻第1号(1938年1月)、240。「國際文化メモ」『セルパン』第82号(1937年11月)、144はこう伝えていた。「[九月]二十日、十一月一日から三日間ロンドンで開催される國際ペン俱樂部理事会に日本ペンクラブから清澤冽氏が派遣されることに決定し、氏は24日横浜出港の秩父丸でアメリカ經由渡歐した。」清澤の記事はこの理事会での、文字どおりの「苦戦」をロンドンから報告したもの。
  - 23 野口富士男「日本ペンクラブ三十年史」『日本ペンクラブ三十年史』、130-131頁。
  - 24 [春山行夫?]「まえがき」クロオド・アヴリイン「ペンクラブ第十六回國際大會報告」『セルパン』第93号(1938年10月)、150。出典未詳、訳者記載なし。
  - 25 「ペン俱樂部の改組」「文化ニユウズ」『セルパン』第91号(1938年8月)、156。この記事は1940年東京大会の中止を伝えるものだが、見出しが「改組」とされて

いることに注目しなければならない。つぎの「なお」書きが「改組」にかかわるものであった。「なほ、日本ペン倶楽部の常任理事たりし勝本清一郎氏が病氣の故を以て辭任し、代つて中島健藏氏が就任した。」勝本は人民戦線事件のあおりで京都の検事局から召喚され、ペンクラブをやめると強要されたのであった。参照、野口富士男「日本ペンクラブ三十年史」『日本ペンクラブ三十年史』、129頁。真相は「病氣の故」ではなかった。

- 26 Y・H[春山行夫]「洋書の輸入制限」『セルパン』第91号(1938年8月) 156-157。  
 27 haru[春山行夫]「後記」『セルパン』第91号(1938年8月) 162。  
 28 村野四郎「一九三八年の田園」『セルパン』第91号(1938年8月) 84-85。  
 29 t-uchida「放送局型受信機 1号」「ラジオ少年の博物館」、<http://www.nnc.or.jp/~t-uchida/upfile/kyoku/kyo01/kyo01.htm>。「ラヂオ」の表記は翌1939年から「ラジオ」となる。放送局型受信機は、鉄と銅の不足のために回路変更を余儀なくされ、やがて、国民型受信機が制定される。  
 30 ラジオによる詩の朗読については、拙稿「その3」、116-118を参照。  
 31 丸善株式会社「一九三八年度海外新聞雑誌豫約期(広告)」『セルパン』第83号(1937年12月) 表紙裏。  
 32 研究社「『時事英語辭典』(広告)」『セルパン』第83号(1937年12月) 本文前広告頁。  
 33 かつて、『英語研究』は英語雑誌ながら文学色が濃厚であったが、主筆が久保田正から高部義信に交代するとともに、1935年4月号から「時文」、のちのことはでいえば「時事英語」を中心とした誌面作りへと転換した。英語圏の情勢へ眼を向ける必要が生じていたのである。『セルパン』4月号、『英語研究 THE STUDY OF ENGLISH』の広告は「潑刺たる現代英語の研究」と謳い、記した。「本誌は高専程度諸君の爲に潑刺たる現代英語を味到せしむる清新無比の英語雑誌である。即ち中心を時事英語に置き、内外國際事情を初め科學・文藝・音樂・美術・スポーツ等を悉して之れに深切なる註釋又は對譯を配す。非常時日本の社會常識としても毎號の必讀を俟つ！」と。参照、『英語研究』April(広告)、『セルパン』第50号(1935年4月) 表紙見返し。「非常時日本」とは、『英語研究』4月号に新しい主筆が記すように、「國際聯盟と袂を別」った日本を意味していた。  
 34 『英語青年』の「片々録」は時事英語強化の状況を伝えているが、無署名記事「英語教員の英國批判」「文化ニユース」『セルパン』第83号(1937年12月) 146も、1937年秋の「日本英語教員第十四回年次大会」、正しくは「英語教授研究所」の年次大会の動向を伝えている。すなわち、11月31日から三日間にわたる年次大会で、文部政務次官は「英語教授のテキストとして新聞を使用することを主張し、現代英語の重要性を強調し、これを世界情勢の動きと接觸させて生々と活用させることを勸告」し、さらに「英語教員の大部分が英文學部の出身であるため、ややともすればこの方面の學問を強調しすぎることを指摘した」のである。今日で

例えば、グローバル化へ向けた英語教育の提唱であるが、時事英語は「渡洋爆撃」の使命を担わされていたのである。

- 35 英語通信社・世界時潮研究会「英文総合文化雑誌 [The] *Current of the World* (広告)」『セルパン』第87号(1938年4月)裏表紙裏。
- 36 「英文総合文化雑誌 [The] *Current of the World* (広告)」『セルパン』第90号(1938年7月)裏表紙裏。
- 37 「英文総合文化雑誌 [The] *Current of the World* (広告)」『セルパン』第94号(1938年10月)裏表紙裏。
- 38 「平素閲読せる雑誌」『學生生徒生活調査(下)昭和十三年十一月調査』[大學、高等學校 大學豫科 高等師範學校 女子高等師範學校 専門學校(女子)ノ部](教學局、1939年) 172、および、173頁。ちなみに、*The Current of the World* が最もよく読まれているのは、官公立高商である。参照、「平素閲読せる雑誌」『學生生徒生活調査(上)昭和十三年十一月調査』[専門學校(男子)ノ部](教學局、1939年) 172-173頁。
- 39 Y・H [春山行夫]「編輯者の言葉」『セルパン』第82号(1937年11月) 158、によれば、『セルパン』のような新興雑誌の数字は実際に読んでいる学生だけが申告するだろうが、「有名な雑誌の申告には、実際の雑誌をよんでいない学生までが、申告書の空欄を埋めるジエスチュアとして」その名を挙げることも考えられるのである。また、Haru [春山行夫]「後記」『セルパン』第94号(1938年11月) 156、によれば「最近文部省が大規模の學生生活の調査をするといふことであるが」これは「主として學生自身の申告を基礎として、第三者による學生の調査を行はないのは片手落」である。「大學の圖書館で実際に學生が借出す雑誌の名前と度数を調べてみたら、學生調査の申告と全然一致してゐない」ということもあったのである。永嶺重敏『雑誌と読者の近代』(日本エディタースクール出版部、1997年) 159頁がいうように、読書調査の多くがアンケート方式を採用しているために、調査対象の申告内容がどこまで正確に現実の読書内容を反映したものかには疑義が付きまとうのである。すなわち、「自己の読書内容を申告する際に、見栄や虚栄からあるいは世間体を慮って比較的世評のいい書物なり雑誌のタイトルを申告してしまう傾向が強く存在することは事実」であり、さらに、「この傾向は複数の雑誌を読んでいた知識人学生の場合に特に顕著に觀察される。その結果、実際に多くの読者に読まれていながら、社会的評価が低く俗悪的イメージの強いものは調査結果からこぼれ落ちてしまい、通りのいいものだけが調査結果に残ることになる。」さらに、この頃の『セルパン』がなおも人民戦線派に近い立場をとっていたことも配慮されるべきであろう。
- 40 R. F. [福原麟太郎]「英學時評」「片々録」『英語青年』第79巻第11号(1938年9月1日) 380。拙稿「その2」 527を参照。
- 41 拙稿「その3」 105-106を参照。

- 42 近藤・結城共訳「W・H・オーデン」『新領土』第3巻第15号（1938年7月）172-175。依拠したテキストは、*New Verse*, 26-27 (November 1937)。Herbert Read と C. Day Lewis は“Sixteen Comments on Auden”（23-30）から、ついで、Stephen Spender, “Oxford to Communism”（9-10）Louis McNeice, “Letter to W. H. Auden”（11-12）。
- 43 外山定男訳エドモンド・ウイルソン「オーデン論」『新領土』第3巻第17号（1938年9月）340。出典は、Edmund Wilson, “Edmund Wilson Regrets the Retrograde, the Oxford Boys Becalmed,” *The New Republic*, LXXXX, 1160 (24 February 1937), 77-78。拙稿「その3」111-113を参照。
- 44 “I have just learned that Auden is driving an ambulance in Spain. There is a good little piece by him on Valencia in *The New Statesman and Nation* for January 30.—E. W.” Cf. W. H. Auden, “Impression of Valencia,” *The New Statesman and Nation*, XIII, 310 (30 January 1937), 159.
- 45 R. F. [福原麟太郎]「英學時評」「片々録」『英語青年』第79巻第11号（1938年9月1日）348。
- 46 W. H. Auden and Christopher Isherwood, “Chinese Diary,” *The New Republic*, LXXXXV, 1226 (1 June 1938), 94-97 ; Christopher Isherwood, “The War in China,” *The New Statesman and Nation*, XV, 383 (25 June 1938), 1061-1062。なお、両誌に掲載された一連の旅行記に関する詳細な書誌的事項とテキストの異同については、Edward Mendelson, “Appendices,” in *The Complete Works of W. H. Auden: Prose and Travel Books in Prose and Verse*, Vol. 1, pp. 812-813を参照。
- 47 Christopher Isherwood, “The Lung-Hai Railway in War-Time,” *The New Statesman and Nation*, XVI, 386 (16 July 1938), 113-114.
- 48 W. H. Auden, “Chinese Soldier,” *The New Statesman and Nation*, XVI, 384 (2 July 1938), 14。詳細は、拙稿「その3」[89]-90を参照。なお、一週間後に、Stephen Spender, “Madrid,” *The New Statesman and Nation*, XVI, 385 (9 July 1938), 73がある。これは、“Translated from the Spanish of Manuel Altolaguirre” と付記されているように、友人の作品の翻訳である。
- 49 拙稿「その3」[89]-90を参照。
- 50 [訳者記載なし]クリストフア・アイシャウツド「漢口前線」『セルバン』第92号（1938年9月）54-56、および、[訳者記載なし]クリストフア・アイシャウツド「隴海線（鄭州 西安）前線」『セルバン』第93号（1938年10月）70-72。前者には出典は記載されていない。
- 51 中野好夫訳 W・H・オーデン、クリストフア・アイシャウツド「犬になつた男」[テーマ小説]『セルバン』第71号（1936年1月）223-231。同号「執筆者の椅子」の紹介はつぎのとおり。「特に中野好夫氏によつて傳へられたオーデンとアイシャウツド合作の「犬になつた男」は、イギリスの最も先端を行く新文學で、十年前



- にコクトオやピカソやモオランを知らない人が文化人でなかつたと同じく、今日以後、オーデンの名を知らない人々は、十年だけ時代におくれてあるといはれて仕方がない程度ですから、是非一讀の要があると思ひます」(235)。詩劇 W. H. Auden and Christopher Isherwood, *The Dog Beneath the Skin* は、Faber and Faber 版で 1935年5月30日、Random House 版は同年10月1日の刊行。中野が依拠したのは前者であろう。『セルパン』登場までの期間は、出版後半年。入手後ほどなく作業がはじまったと考えていい。
- 52 [筆者紹介]クリストーフ・アイシャウトド「漢口前線」『セルパン』第92号(1938年9月) 54。これは、Christopher Isherwood, “The War in China,” *The New Statesman and Nation*, XV, 383 (25 June 1938), 1061-1062に拠ったもの。
- 53 「王室金牌詩賞」の対象になったのは、正確には、*Spain* (1937)ではなく *Look Stranger!* (Faber and Faber, October 1937) であった。拙稿「その3」、162-163、注83を参照。
- 54 クリストーフ・アイシャウトド「漢口前線」『セルパン』第92号(1938年9月) 54。ただし、つづく記録は3月の時点のものである。
- 55 拙稿「その2」、519を参照。
- 56 [前書]クリストフ・アイシャウトド「隴海線(鄭州 西安)前線」『セルパン』第93号(1938年10月) 70。
- 57 同上、70。
- 58 W. H. Auden, “Meeting the Japanese,” *New Masses*, XXVIII, 8 (16 August, 1938), 10, in *The Complete Works of W. H. Auden: Prose and Travel Books in Prose and Verse*, Vol. 1: 1926-1938, ed. Edward Mendelson, p. 450; Christopher Isherwood, *Christopher and His Kind*, p. 311.
- 59 原田勝正『鉄道』[産業の昭和社會史8](日本經濟評論社、1988年) 82頁以下、および、139-143頁を参照。1934年1月、呉の海兵団に入団する兵士を見送る人々が京都駅にあふれ七十数名の死者をだした事件があり、その後、停車場司令官の下に出征軍隊の歡送は統制されていた。また、原田によれば、1937年から翌年7月までの一年間に動員輸送で運ばれた兵力は約200万人(126頁)とされる。
- 60 Christopher Isherwood, *Christopher and His Kind*, pp. 310-311.
- 61 *Ibid.*, p. 315.
- 62 Humphrey Carpenter, *W. H. Auden: A Biography*, (George Allen and Unwin, 1981; Oxford University Press, 1992), p. 245.
- 63 衣巻省三「戦争詩の夕」『文藝汎論』第8巻第12号(1938年12月) 70。
- 64 拙稿「その3」、119-120を参照。
- 65 拙稿「その4」、245-250を参照。
- 66 Humphrey Carpenter, *W. H. Auden: A Biography*, p. [253]. この前後の伝記的な記述は、この書を参照している。

- 67 Edward Mendelson, *Later Auden* (Farrar Straus Giroux, 1999), p. 1.
- 68 足立重訳クリストファ・イシャウツド「支那戦線報告」『セルパン』第105号（1939年9月）114-131。
- 69 [前書] 足立重訳クリストファ・イシャウツド「支那戦線報告」『セルパン』第105号（1939年9月）114-115。
- 70 参照、[訳者記載なし] H・G・ウエルズ「ペンクラブ大会への覚書」『セルパン』第108号（1940年1月）58-64。出典は末尾に記載されるように「『ニュー・ステイツマン&ネーション』10月21日」号。「附記」にあるように、『セルパン』はこの記事によってストックホルム大会の流会を知ったのである。
- 71 Haru [春山行夫]「後記」『新領土』第6巻第31号（1939年11月）75。
- 72 春山行夫「満州國の印象」『セルパン』第109号（1940年2月）91。
- 73 同上、92。
- 74 同上、87。
- 75 岩崎勉訳アリストテレス「メタフュジカ」『世界大思想全集』第2巻（春秋社、1929年3月）26頁。
- 76 春山行夫「満州國の印象」『セルパン』第109号（1940年2月）87。
- 77 同上、87-88。
- 78 同上、92。
- 79 鮎川信夫「雑音の形態」『新領土』第5巻第30号（1939年10月）324。
- 80 鮎川信夫「近代詩人」『LE BAL』第21輯（1939年12月）52。
- 81 中桐雅夫「後記」『LE BAL』第21輯（1939年12月）59。
- 82 岩崎勉訳アリストテレス「メタフュジカ」『世界大思想全集』第2巻、28頁。
- 83 鮎川信夫「文學の攝理」『荒地』第5輯（1940年5月）66-80。末尾に「十五年三月七日」と記載。
- 84 同上、69。
- 85 同上、69-70。
- 86 参照、1940年2月21日付森川義信宛書簡、牟礼慶子編「森川義信宛鮎川信夫書簡 全集未収録資料・書簡」『現代詩手帖』第44巻第11号（2001年11月）37-38。
- 87 森川義信「眠り」『荒地』第5輯（1940年5月）58。
- 88 鮎川信夫「形相」『LE BAL』第22輯（1940年4月）40-41。末尾に「1. 30, 1940」と記載。
- 89 同上、40-41。
- 90 同上、41。
- 91 鮎川信夫「詩的青春が遺したもの」『鮎川信夫著作集』第8巻（思潮社、1976年）259頁。初出は、「季節はすでに終わりであった」『現代詩手帖』1974年8月号。
- 92 村野四郎「日暮れの人」『文藝汎論』第10巻第1号（1940年1月）14-15。拙稿「その4」、251-252を参照。

- 93 Anon., "Noonday & Night," *The Time*, XXXIV, 18 (October 30, 1939), 66. André Malraux とともに W. H. Auden の写真を掲載。
- 94 近藤東訳「大戦下の英・米・佛」『新領土』第6巻第34号(1940年2月)、253。末尾に「"Time" Oct. 30, 1939」と記載。この頃の近藤の海外文学に関する情報はこのアメリカの週刊誌であった。
- 95 近藤東訳「大戦下の英・米・佛」、254。
- 96 "Noonday & Night," 68.
- 97 小島輝正『春山行夫ノート』(蜘蛛出版社、1980年) 179頁。
- 98 初校タイプ原稿については、Edward Mendelson, *Later Auden*, p. 73ff.
- 99 阿比留信訳 W・H・オウデン「一九三九年・九月」『新領土』第6巻第33号(1940年1月)、169-171。テキストは三段組のため行送りに難があるので、ここでは、修正を加えて引用する。引用の傍点はテキストどおり。
- 100 拙稿「その3」、144を参照。
- 101 奈切哲夫訳 W・H・オーデン「オーデン詩抄(1)(2)(3)(4)」『新領土』第5巻第29号(1939年9月) 276-277; 『新領土』第5巻第30号(1939年10月) 332-334; 『新領土』第5巻第32号(1939年12月) 115-117; 『新領土』第5巻第32号(1940年2月) 230-232。各訳詩の配列から、W. H. Auden, *Poems*, 2nd ed. (Faber and Faber, November 1933) に依拠したことがわかる。同版に依拠した W. H. Auden, *Poems*, 2nd ed. (Random House, September 1934) があるが、この版には、“The Orators” と“The Dance of Death” が加えられた。
- 102 上田保「後記」『新領土』第6巻第35号(1940年3月) 306。
- 103 拙稿「その4」、259を参照。
- 104 木下常太郎「詩壇時評」『文藝汎論』第10巻第5号(1940年5月) 19。
- 105 近藤東「後記」『新領土』第7巻第37号(1940年5月) 59。
- 106 拙稿「その3」、92を参照。
- 107 鮎川信夫「形相」『新領土』第7巻第37号(1940年5月) 31。
- 108 鮎川信夫「遊園地區」『新領土』第2巻第11号(1938年3月) 322-323。
- 109 鮎川信夫「河」『新領土』第3巻第13号(1938年5月) 45。
- 110 鮎川は「尾島の近代英詩の講義」と記しているが、正式科目名は「アイルランド文学研究」あるいは「上代よりクラシシズム迄の詩」のいずれかであろう。1940年度早稲田大学英文科の講義科目については、「各大学英文学講義科目早稲田大学」『英語青年』第83巻第7号(1940年7月1日) 222を参照。
- 111 牟礼慶子編「森川義信宛鮎川信夫書簡 全集未収録資料・書簡」『現代詩手帖』第44巻第11号(2001年11月) 41。
- 112 牟礼慶子編「森川義信宛鮎川信夫書簡 全集未収録資料・書簡」、42。テキストに使用されている活字がないため、引用文中では「悞」とした。
- 113 鮎川信夫「陰翳」『新領土』第7巻第42号(1940年10月) 298。末尾に、

「8.30,1940」と記載。

- 114 参照、「最近読んだものではハックスレイの「パスカル」が一番の収穫だった。僕が6月になつて買った本といへばそれが一冊」。牟礼慶子編「森川義信宛鮎川信夫書簡 全集未収録資料・書簡」、41。
- 115 拙稿「その3」、150-152を参照。
- 116 牟礼慶子編「森川義信宛鮎川信夫書簡 全集未収録資料・書簡」、40-41。
- 117 鮎川信夫「泉の變貌」『詩集』第25輯（1940年11月）2-6。末尾に「9.20,1940」と記載。『LE BAL』を改題して引継ぎ「第25輯」とされた。
- 118 同上、2-3。
- 119 春山行夫「収穫期（Fragment）」『新領土』第6巻第33号（1940年1月）148。冒頭の二行「小麦の収穫が終つたら／ダンチツヒ問題が悪化した」は、それぞれつぎの『セルパン』の記事と関連している。「ヨオロツパでは収穫（小麦）がはじまつてゐる。正統派の軍事的法則によると、**収穫がすんだ後**が、ドイツにとつて事件を惹起するに最も適当な時期と見られてゐる。（『N・リパブリック』社説、[7月]5日）」（ゴチック原文のまま）「雄鳥通信」『セルパン』第105号（1939年10月）154、この記事については、拙稿「その4」、241を参照。他に、編輯部「（アドルフ・ヒトラー「ダンチヒ演説」）解説」『セルパン』第106号（1939年11月）45によれば、「十月六日のドイツ國會に於ける對英拂宣言はその大要がわが國の各新聞紙に掲載せられたのに反し、[9月19日]ダンチツヒ宣言は、一般の戰爭記事が輻輳したためか、あまり重視されなかつたやうであるが、わが社は兩演説を對照検討の結果、モロトフの宣言に對位するドイツ側の意見を示す材料としては、ダンチツヒ宣言が適當であると考へ、本號にその全貌を紹介した」のである。モダニスト詩人春山行夫は、同時にジャーナリストであつた。なお、「ダンチヒ演説」を重視したのは、ヒトラーが「『我が闘争』の東方政策を否定し去つた點を見逃せない」（同上45）からである。
- 120 参照、木内正人「昭和15年（1940年）の出来事」、[http://www.ca.sakura.ne.jp/~masato\\_k/nob2/s15.htm](http://www.ca.sakura.ne.jp/~masato_k/nob2/s15.htm)。
- 121 「雄鳥通信」『セルパン』第118号（1940年11月）120。
- 122 百田宗治「詩人懇話會賞その他」[最近の藝術賞]『セルパン』第111号（1940年4月）60。選考委員は、百田宗治、堀口大學、萩原朔太郎、および、『文藝汎論』の岩佐東一郎、城左門。
- 123 村野四郎『體操詩集(Turn Gedichte)』（アオイ書房、1939年12月：日本近代文学館、1980年）。参照、和田博文「作品と写真の遭遇 村野四郎『體操詩集』成立の文脈」『日本近代文学』第42集（1990年5月）39-53。和田の「『體操詩集』収録作品、初出誌・再掲誌一覧」（47）によれば、収録詩「鐵亞鈴」は、拙稿「その2」、525に引用した村野四郎「眞冬賦」『三田文學』第13巻第2号（1939年2月）270より以前、『旗魚』1931年11月号が初出となる。

- 124 Leni Riefenstahl mit zahlreichen Aufnahmen von den Olympischen Spielen 1936, *Schönheit im Olympischen Kampf* (Berlin; Im Deutschen Verlag, [c1937]), p. 73, p. 203, p. 204, p. 64, and p. 224.
- 125 北園克衛『體操詩集 (Turn Gedichte)』、カバー表見返し。
- 126 近藤東「體操する主知 村野四郎『體操詩集』」[書評]『新領土』第6巻第34号(1940年2月)、244、および、245。「およそハチマキをしたスポオツマンなどは僕の好む形態ではないので敬遠した」は、村野四郎「後記」『新領土』第6巻第32号(1939年12月) 131。
- 127 [同著者による近刊]『體操詩集 (Turn Gedichte)』、カバー裏見返し。
- 128 村野四郎「詩的思考の遍歴」(金子光晴、小野十三郎、高橋新吉、北園克衛と共著)『現代詩の実験』(宝文館、1952年7月) 70-71頁。村野はつけていう。「当時の古きサンボリストや、民主主義的な觀念詩人たちや、又は超現実主義詩人たちが同居した詩壇において、そのいずれもが觸れえない新しい詩的美の世界を展開したという点において、著者が自分で言うのもおかしいが、現代詩史の上に立てられる明確な一個のモニュメントたりうると言えると思う」(71頁)と。
- 129 春[山行夫]「後記」『新領土』第6巻第35号(1940年3月) 307。
- 130 春山行夫「後記」『新領土』第6巻第35号(1940年3月) 307。
- 131 「執筆者の椅子」『セルパン』第111号(1940年4月) 118。ここで配布された、2月8日付、徳富蘇峰の東亞操觚者懇談會へのメッセージは、「東亞言論人に寄す」として、同号、10-14に掲載。
- 132 春山行夫「後記」『新領土』第6巻第36号(1940年4月) 358。
- 133 永田助太郎「後記」『新領土』第6巻第35号(1940年3月) 308。
- 134 村野四郎「後記」『新領土』第6巻第36号(1940年4月) 357。
- 135 近藤東「後記」『新領土』第6巻第36号(1940年4月) 357。
- 136 「日本文化聯盟」と松本学の構想については、伊藤隆「解題」伊藤隆・広瀬順暗編松本学『松本学日記』[近代日本史料選書11](山川出版社、1995年) 小田部雄次「日本ファシズムの形成と『新官僚』 松本学と日本文化聯盟」日本現代史研究会編『日本ファシズム(1)国家と社会』(大月書店、1981年) および、松本学「文化國際聯盟の提唱」『外交時報』第754号(1936年5月1日)によれば概略、つぎのとおり。

松本学は、5・15事件後の斎藤内閣の下、1932年5月より1934年7月まで内務省警保局長、同年11月、貴族院議員に勅撰される。警保局長在任中、治安維持法違反による被検挙者・被起訴者数は戦前最高を記録したといわれる。内務省警保局なかにおかれた保安課はその統括下に特別警察すなわち特高をおりており、同局の図書課は刊行物の発行禁止を行う権限を持っていた。1934年1月、中国・四国九県警察本部長会に出席した松本は、「左翼の方面も大体片づいた」と記者の質問に答えた。

「日本文化聯盟」は、わが国が国際聯盟を脱退しようとする頃、1933年2月に結成され、その7月、結成式をあげた。当時内務省警保局長であった松本が、郷誠之助から「思想対策について相談があったのでプロレタリア文化聯盟の逆手をとって日本文化聯盟という団体を作って、国内と海外に亘り日本文化運動を展開した」のである。日本文化聯盟を構成する団体のひとつとして松本が構想したのが、「文芸院」であった。この聯盟の財源は長らく不明であったが、郷が三井、三菱、住友各銀行と話をつけて基金をととのえ、政府の補助を受けて発足したのである。郷はこのとき日本経済連盟会長、財界の大立者であった。

137 「文芸懇話会」、「詩歌懇話会」、および、「詩人懇話会」については、和田利夫『昭和文芸院瑣末記』（筑摩書房、1994年）を柱として纏めるならば、概略、つぎのとおり。

「文芸懇話会」は、1934年3月29日に結成。野口富士男『日本ペンクラブ三十年史』『日本ペンクラブ三十年史』、61頁によれば、構成員は、宇野浩二、加藤武雄、上司小剣、川端康成、岸田国土、佐藤春夫、里見弴（のち脱退）、島崎藤村、白井喬二、近松秋江、徳田秋声、豊島与志雄、中村武羅夫、長谷川伸、広津和郎、正宗白鳥、室生犀星、山本有三、横光利一、菊池寛、三上於菟吉、および、吉川英治、あわせて22名。松本は、この団体を「文芸院」と名づけて文芸統制の足場とする考えであったが、野口によれば、「徳田秋声と島崎藤村の庶民的な在野精神に押しまわられて、会の名称まで文芸懇話会などという微温的なものとせざるを得なくなった。」「文芸懇話会」は、1937年7月、帝国美術院が文芸家を含む帝国芸術院として改組されたことに伴い、解散した。

「詩歌懇話会」は、1936年10月13日に結成。先立つ7月1日の会合に招待された者は、『セルパン』1936年8月号「学藝ニュース」欄の記事「詩歌人の懇談會」によれば、つぎのとおり。歌壇から、佐佐木信綱、石樽千亦、窪田空穂、尾上柴舟、吉井勇、太田水穂、齋藤茂吉、北原白秋、金子薫園、折口信夫、土屋文明、岡麓、前田夕暮、土岐哀果、川田順、尾上篤二郎、松村英一、白井大翼、宇都野研、以上19名。詩壇から、土井晩翠、木下空太郎、相馬御風、富田碎花、佐藤春夫、柳澤健、河井醉茗、薄田泣菫、野口米次郎、三木露風、川路柳紅、日夏耿之介、萩原朔太郎、島崎藤村、室生犀星、福士幸次郎、堀口大學、大木敦夫、高橋[村]光太郎、春山行夫、千家元麿、福田正夫、白鳥吾吾、百田宗治、佐藤惣之助、竹友藻風、以上26名。[ ]は、佐藤春夫が記憶している当日の出席者。この「詩歌懇話會」もまた、松本の日本文化連盟の傘下に位置づけられるはずのものであった。松本は詩歌懇話会が結成された10月13日の日記に、「詩歌懇話会を開く。会するもの三十五人、無遠慮な連中で議論もするし、さっぱりして面白い」と記した（『松本学日記』、187頁）。出席したひとり川路柳虹によれば「これから時々こんな会合をいたませう」ということで終わり、その後も「何をなすのかもまだ誰も口を開かないでゐる」状態であった。

この詩歌懇話会の余波は「歌人協会」にも及んだ。同年10月10日、総会で協会改革草案が示され解散した。参照、逗子八郎「歌人協会改組と新短歌クラブ」『學藝ニュース』『セルパン』第70号(1936年12月)、116-117。装いを改めた「大日本歌人協会」は、翌月11月27日に成立した。

この詩歌懇話会は、結成の発端となった北原白秋の記録によれば、必ずしも活発ではなかった。さらに、日本文化聯盟から詩歌懇話会に渡った資金は、1936年7月-1937年6月年度の日本文化聯盟の総支出額24万2千300円(「日本文化聯盟支出概計書」小田部雄次「日本ファシズムの形成と『新官僚』 松本学と日本文化聯盟」、92-93頁)の内、わずか、1千34円であった。そして、経緯は不明だが、1938年4月12日、松本は「詩歌懇話会の結末をつける為」に午餐会を開き、「詩と歌に各一千円宛寄附」することとした。そして、21日、詩歌懇話会のメンバーによる謝恩会が開かれた(『松本学日記』、272頁、および、274頁)。北原白秋によれば、松本から「一半を大日本歌人協会へ、その一半を詩人懇話会に寄託」された。1937年7月-1938年6月の日本文化聯盟からの支出額、2千80銭がこれに相当する。歌人については、すでに「大日本歌人協会」があり、受け皿となるのは必然であった。

「詩人懇話会」は、詩歌懇話会の解散にともなって発足した。松本への謝恩会に出席した西條八十が『セルパン』1938年7月号に記すところによれば、「詩人側へ寄贈された」1千円は「今後五年間、分割して毎年若い詩人に受賞される」こととなった(23)。この案を提案したのが誰であったかは不明だが、詩人懇話会賞、すなわち「詩人賞」の制度ができあがったのである。ただし、詩歌懇話会の解散はすでに松本と話がついていたものと思われる。詩歌懇話会の解散に先立つ3月1日に詩人賞審査委員会が開催され、第一回詩人賞に、佐藤一英が『空海頌』で受賞した。審査委員17名のうち当日の出席者はつぎの10名。白鳥省吾、堀口大学、百田宗治、前田鉄之助、大木敦夫、西條八十、佐藤惣之助、春山行夫、萩原朔太郎、室生犀星。なお、以降の詩人賞は、第二回(1939年度)三好達治『艸千里』『春の岬』、第三回(1940年度)西村皎三『遺書』、第四回該当なし、第五回(1942年度)蔵原伸二郎『戦闘機』。

138 第一回新人賞審査委員会に欠席した北原白秋の、「詩人賞禍あり 室生犀星に与ふ」にはじまる『改造』誌上での論争の詳細については、和田利夫『昭和文芸院瑣末記』、235-238頁。

139 春山行夫「詩人懇話會の記」[日本詩の夕]『セルパン』第112号(1940年5月)、84。

140 同上、84。

141 伊藤信吉「授賞式の印象」[日本詩の夕]『セルパン』第112号(1940年5月)、82-83。長谷川賞は賞金300円であった。詩人賞については、は上注137のように、千円を基金としていたから、賞金は200円であった。

- 142 百田宗治「詩人懇話會賞その他」[最近の藝術賞]『セルパン』第111号(1940年4月) 58。
- 143 村野四郎「朗讀會の印象」[日本詩の夕]『セルパン』第112号(1940年5月) 83。
- 144 春山行夫「詩人懇話會の記」[日本詩の夕]『セルパン』第112号(1940年5月) 84。「聴衆はあらかじめ、朗讀詩を全部印刷したパンフレット、朗讀詩集を興へられていた」と村野は記している(84)。春山行夫編輯『日本詩の夕 朗讀詩集』(東京:詩人懇話會、1940年3月24日)は、神奈川近代文学館蔵。
- 145 長谷川巳之吉「詩と音楽 鶴沼海岸だより」『セルパン』第112号(1940年5月) 81。
- 146 志村辰夫「『日本詩の夕』メモワール」『新領土』第6巻第36号(1940年4月) 354-355。主催は詩人懇話會、贊助は『コギト』『四季』『女性時代』『詩洋』『新領土』『VOU』『文藝汎論』『歷程』『蠟人形』。有力詩誌をほぼ網羅するものであった。「朗讀は山本和夫の戦争詩から始められた」が、志村はこれに触れていない。山本和夫『戦争』は、詩人懇話會賞とともに文藝汎論賞の候補となった。
- 147 村野四郎「朗讀會の印象」[日本詩の夕]『セルパン』第112号(1940年5月) 84。
- 148 近藤東「後記」『新領土』第6巻第26号(1940年5月) 357。「J氏」とは神保光太郎。1939年12月刊行の二つの詩集『鳥』(四季社)、『雪崩』(河出書房)がある。近藤の反発は、萩原をとおして「日本浪漫派」に向けられていた。
- 149 瀧口修造「文化映畫と詩」『セルパン』第112号(1940年5月) 48。
- 150 北園克衛「詩と詩人に就て」『文藝汎論』第10巻第7号(1940年7月) 36-38。末尾に「五・六・四〇」と記されている。おそらく「五月六日」の意であろう。
- 151 鮎川信夫「抗議への抗議」『蠟人形』第11巻第7号(1940年8月) 74-75。
- 152 萩原朔太郎編『昭和詩鈔』[富山房百科文庫99](富山房、1940年3月18日)。
- 153『現代詩人集1』(山雅房、1940年5月20日)。以降、『現代詩人集6』(山雅房、1940年10月20日)まで、毎月20日発行。
- 154 室伏高信「文明の前途」『セルパン』第94号(1938年11月) 11、および、12。「その2」、521-522を参照。
- 155 室伏高信『戦争私書』(中公文庫、1990年) 235頁にいう、「もともと春山行夫の翻訳でわたしは名前を貸しただけだ」とは正しい。なお、刊行にあわせた室伏高信「『我が闘争』について」『セルパン』第115号(1940年8月) 122ではこうである。「ヒットラアその人がもともと理論家であるよりは行動の人であるやうに、この書も理論の書といふよりはむしろ行動の書である。従つて、また理論の書としては不完備な點もあり、淺薄と見える點もないことはない。しかし、彼はこの書を書きあげたといふよりは、この書を行動した。」
- 156「『我が闘争』(広告)」『セルパン』第114号(1940年7月) 6月に、新居格訳ジョン・スタインベック『怒りの葡萄』も刊行された。同号広告によれば、「輝かしい資本主義的機械文明の背後に横はるアメリカの深刻なる現實を描破してピコ



- リツア賞を得た劃期的長篇小説!!」であった。「この名作の映畫化」にも触れている。
- 157 長谷川巳之吉「『我が闘争』(広告)、『セルパン』第115号(1940年8月)。
- 158 [訳者記載なし]ウイングダム・ルイス「ヒットラー論」、『セルパン』第115号(1940年8月)、1-14。
- 159 Wyndham Lewis, *The Hitler Cult*, (London: Dent, 1939). 春山のいう「(Dent, 1938, 7志6片)」は「1939」の誤り。この書については、Jeffrey Meyers, *The Enemy: A Biography of Wyndham Lewis* (Routledge & Kegan Paul, 1980), p. 245を参照。
- 160 Wyndham Lewis, *Hitler* (London: Chatto & Windus, 1931). 刊行は1931年3月。のち、1932年、ベルリンの Reimar Hobbing Verlag からドイツ語訳で出版された。詳細は、Jeffrey Meyers, *The Enemy: A Biography of Wyndham Lewis*, p. 190.
- 161 春山 [行夫]「後記」、『新領土』第7巻第49号(1940年7月)、167。
- 162 [春山行夫]「解説」ウイングダム・ルイス「ヒットラー論」、『セルパン』第115号(1940年8月)、3。
- 163 同上、4。
- 164 ウイングダム・ルイス「ヒットラー論」、『セルパン』第115号(1940年8月)、14。
- 165 庄司徳太郎・清水文吉編著『資料 年表 日記時代史 現代出版流通の原点』(出版ニュース社、1980年)、6-7頁。さらに、詳細は、奥平康弘監修『出版新体制の全貌 日本出版会の概要』[言論統制文献資料集成 12](日本図書センター、1992年)所収、小島新生編纂「出版新体制の胎動から出版文協の設立へ」、『出版新体制の全貌』(出版タイムス社、1941年7月18日)、1-71頁を参照。
- 166 村野四郎「後記」、『新領土』第7巻第40号(1940年8月)、223。
- 167 拙稿「その4」、260-261を参照。村野の興奮を笑うべきではない。たとえば、5月29日の試写会に出掛けた青野末吉は日記にこう記した。「「オリンピア」(民族の祭典)の試寫(歌舞伎座)を觀る。素晴らしき映畫なり。ドイツの逞しい精神を感ず。日本選手に拍手す。」(『青野末吉日記』[出書房新社、1964年]、41頁。)青野は1938年2月1日(人民戦線事件)治安維持法違反で検挙され、保釈出獄となったが、いまなお観察下におかれており日記も提出しなげばならなかった。しかし、そのような状況を配慮してもなお、この記述に偽りはない。問題は、村野の興奮が醇化抽象化され、彼の作品を浸食しはじめるところにある。
- 168 大島豊「新編輯者の言葉」、『セルパン』第117号(1940年10月)、132。
- 169 VOU クラブ「宣言」、『VOU』第30号(1940年10月)、1-2。
- 170 上田保「後記」、『新領土』第7巻第42号(1940年10月)、329。
- 171 村野四郎「島嶼の秋」、『新領土』第8巻第43号(1940年12月)、22。
- 172 巖谷大四『「非常時日本」文壇史』(中央公論社、1958年)、15頁。
- 173 櫻本富雄『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』(青木書店、1995年)、17頁。櫻本が依拠した引用は『文藝年鑑二六〇三年版』による。ここで選

- 考された「準備委員」19名については、巖谷大四『「非常時日本」文壇史』、15頁を参照。
- 174 巖谷大四『「非常時日本」文壇史』、17頁によれば、「詩壇の中堅村野四郎、神保光太郎、北園克衛、蔵原伸二郎、岩佐東一郎、丸山薫、田中克巳、菱山修三、山本和夫、城左門の諸氏等が集まって、「日本詩人協会」が誕生した（十月二十一日）」という。ただし、これは「打合せ」であった。
- 175 引用は、櫻本富雄『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』、12頁による。
- 176 春山行夫を含む「大陸開拓文芸懇話会」もここに加盟した。櫻本富雄『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』（青木書店、1995年）21-23頁を参照。なお、巖谷大四「昭和文壇略年表」『「非常時日本」文壇史』、203頁によれば、1941年6月17日、「大日本詩人協会」が結成された。櫻本富雄『空白と責任 戦時下の詩人たち』（未来社、1983年）9-10頁によれば、会員は、北原白秋、河井醉茗、高村光太郎、佐藤春夫、堀口大學、萩原朔太郎、坂本越郎、火野葦平ら。また、櫻本によれば、当時の詩誌などに、「大」を冠した「大日本詩人協会」と「日本詩人協会」とのあいだの、「両協会の確執をうかがわせるような文がある」（10頁）と。
- 177 山本和夫「戦争詩に就いて」『新領土』第8巻第44号（1941年1月）49。
- 178 村野四郎「詩人祭の夜」『セルパン』第122号（1941年3月）90。
- 179 同上、90。
- 180 同上、90。
- 181 同上、90。
- 182 同上、90。
- 183 同上、90-91。なお、科学主義工業社は、後注186でも触れるように、「理研コンツェルン」の一翼を占めていた。
- 184 同上、92。
- 185 同上、92。
- 186 村野四郎「若い重役 朗讀用」『新領土』第8巻第46号（1941年3月）175。これは附記にあるように、『新領土』創刊号の「サラリーマン週間」を群読用に改作したもの。なお、「村野四郎年譜」『村野四郎全詩集』（筑摩書房、1968年）593-594頁によれば、1940年12月、詩人は「理研コンツェルン本社から派遣されて理研電具株式会社の常務取締役となり、電気通信器部品の製造に当たる。陸軍造兵廠、艦政本部、航空本部の共同管理工場の責任者となり召集を免る。」「理研コンツェルン」、および、総務部勤務時代に編集に関与した『科学主義工業』については、勝村誠「『科学主義工業』解題」、<http://www.tama.or.jp/~katz/history/kagaku/kaidai.html> を参照。村野の理研本社総務部でのサラリーマン生活の様子は、上記村野四郎「サラリーマン週間」『新領土』第1巻第1号（1937年5月）35の他

- に、村野四郎「近代修身」『新領土』第3巻第13号(1938年5月)25に、「機械學會誌の中からノ神々の言葉を引用して」の二行がある。また、サラリーマンと詩人との両立について、「詩を書くこと以外に詩人が職業を持たねば生きてゆけない事實を、今更イキドホつて見たところで、それは詩人らしい十九世紀的感慨に過ぎない。寧ろ新しい詩人は啄木的なモラルを輕蔑し、肉體の為にラヂオ體操をする詩人を尊敬すべきである」とはじまる、村野四郎「詩人が現れる高層建築」[詩人職場隨筆集]『蠅人形』第9巻第9号(1938年9月)70-71がある。
- 187 菊島常二「詩人祭の朗讀」『新領土』第8巻第47号(1941年4月)246。この群讀作品「若い重役 朗讀用」は、村野四郎「地理 三月」『新領土』第8巻第46号(1941年3月)212によれば、「二人の聲のオクターブが夫々異なる様に工夫」されており、「對話風になつてくるので必然的にザハリヒな要素がはいつてくる點なども注目に値する」ものであった。なお、菊島のいう成功した例は近藤東の朗讀であった。そのテキストは、近藤東「青イシグナル(朗讀詩)」『新領土』第8巻第47号(1941年4月)228。
- 188 同上、246。
- 189 菊島常二「斷層」『新領土』第8巻第47号(1941年4月)229。
- 190 参照、坪井秀人「附録 朗讀詩放送の記録」『声の祝祭 日本近代詩と戦争』(名古屋大学出版会、1997年)40-42頁。この書には放送用音盤によるCDが付けられている。西村将洋氏のご教示によって、この注目すべき仕事の存在を知った。この場を借りてお礼もうしあげる。
- 191 大島豊「編輯者の言葉」『セルパン』第121号(1941年2月)128。
- 192 大島豊「編輯者の言葉」『セルパン』第122号(1941年3月)128。
- 193 [高部義信]「編集餘記」『英語研究』第34巻第1号(1941年4月)120。
- 194 拙稿「その2」498を参照。
- 195 「情報局管制(勅令第八百四十六号・昭和十五年十二月)[六日施行]」内川芳美編集解説『現代史資料』第41巻[マス・メディア統制2](みすず書房、1975年)276-277。他に、「情報局分課規程(昭和十五年十二月)[六日施行]」、内部資料「情報局ノ組織ト機能(昭和十五年十二月)」、および、「情報局機構案(昭和十五年十二月)」、「情報局職員配置表(昭和十五年十二月)」、280-316頁を参照。
- 196 「情報局設置要綱(内閣情報部機構改正協議会決定・昭和十五年九月)」『現代史資料』第41巻、273-274頁によれば、内閣情報部の改組拡充によって、外務省情報部、内務省警保局、陸軍省情報部、海軍省軍事普及部、逓信省の日本放送協会・同盟通信社の監督に関する事項を含む、それぞれ関連事務が移管され情報局となった。
- 197 岩波書店編『岩波書店八十年』(岩波書店、1997年)211頁。
- 198 [情報局内部資料]「情報局ノ組織ト機能(昭和十五年十二月)」『現代史資料』第41巻、300頁。事実、内川芳美「資料解説」が、内務省警保局検閲課が同時に

- 情報局第四部第一課を兼ねていた (xxxv) ことを指摘するように、1941年4月『出版警察報』に掲載された「最近に於ける出版界の動向」には、「内務省警保局検閲課情報局第四部第一課通報」(342頁)として、内務省と情報局の各担当課が並記されている。
- 199 中野誠編「国家総動員法(昭和13年法律第55号)」 「中野文庫」、<http://duplex.tripod.co.jp/hou/hs13-55.htm> # 国家総動員法。
- 200 「情報局ノ組織ト機能(昭和十五年十二月)」 『現代史資料』第41巻、309-310頁。
- 201 本文に引用する新居と阿部の他に、石原純「洋書輸入の問題」、嘉治隆一「輸入文獻を公開せよ」、鶴見祐輔「文藝家の奮起を望む」、本多顯彰「情報局に一言」、林謙「輸入統制と翻譯統制」、清澤冽「書籍よりも良心」と併せて、8点。
- 202 新居格「輸入審査の要點」[特輯「洋書の輸入統制と文化」] 『セルパン』第122号(1941年3月) 80。なお、『丸善百年史 日本近代化のあゆみと共に』下巻(丸善株式会社、1981年) 987-988頁によれば、丸善などが加入する「洋書輸入懇話会」は「洋書輸入審議会(マ)」に代表を送り、やがて、1941年3月3日、「海外出版物輸入同業会」が19社によって結成され、丸善が理事長、三越、三省堂、南江堂、バード商会、国際書房が理事となった。この海外出版物輸入同業会が、現在の「日本洋書協会」の前身である。参照、日本洋書協会事務局「日本洋書協会の概要」、<http://www.jaip.gr.jp/jaip/jaip-gaiyo.html>。
- 203 同上、80。
- 204 同上、81。
- 205 阿部眞之助「無形の文化力」[特輯「洋書の輸入統制と文化」] 『セルパン』第122号(1941年3月) 82。
- 206 大島豊「編輯者の言葉」 『セルパン』第122号(1941年3月) 128。
- 207 R. F. [福原麟太郎] 「英學時評」「片々録」 『英語青年』第84巻第12号(1941年3月15日) 380。
- 208 大島豊「編輯者の言葉」 『新文化』通巻第133号(1942年2月) 96。
- 209 「編輯後記」では一貫してイニシャル「T」と記される。敗戦後、十返「筆」と改名。
- 210 T [十返一] 「編輯後記」 『新文化』通巻第134号(1942年3月) 96。十返は後に『文壇放浪記』(角川書店、1962年) 52頁に記す。「私の編集第一号の雑誌は、おどろくほど売れた。自慢じゃないが本当である。スキヤ橋の銀座の第一書房で、店員が驚くほど売れたのである。その代り内容はいわぬが花 今なら戦犯ものである。」
- 211 「お断り」 『新文化』通巻第135号(1942年4月) 31。
- 212 [無署名] 「決戦下の學生(巻頭言)」 『新文化』通巻第136号(1942年5月) 7。
- 213 T [十返一] 「編輯後記」 『新文化』通巻第136号(1942年5月) 96。

- 214 「本誌の御購讀について」『新文化』通巻第139号 1942年8月、84。
- 215 T [十返一] 「編輯後記」『新文化』通巻第142号 (1942年11月) 80。
- 216 十返肇 『文壇放浪記』(角川書店、1962年) 52-53頁。
- 217 拙稿「その3」、93-94を参照。
- 218 山中恒 『新聞は戦争を美化せよ! 戦時国家情報機構史』(小学館、2001年) 579頁、および、巖谷大四 『「非常時日本」文壇史』、19頁。なお、奥平康弘監修 『戦前の情報機構要覧』[言論統制文献資料集成 20](日本図書センター、1992年) 258、および、261頁によれば、第五部第三課課長上田俊次の下で情報官(本務)であった井上司郎は、のち、課長として、1942年6月18日から1943年3月31日、改組にともない、第四部文芸課長として、1943年4月1日から1943年10月31日、さらに、第二部文芸課長として、1943年11月1日から1945年3月31日まで在任。
- 219 T [十返一] 「編輯後記」『新文化』通巻145号 (1943年2月) 64。
- 220 「出版業務令」(1943年2月17日) および、「特殊法人・日本出版会」(1943年3月11日創立)については、関口安義・布川角左衛門「第一書房 長谷川巳之吉 生涯と事業」『第一書房 長谷川巳之吉』(日本エディタースクール出版部、1984年9月) 74-76頁を参照。
- 221 野田 [宇太郎] 「編輯後記」『新文化』通巻第149号 (1943年6月) 64。野田は後に、「第一書房しんがりの記」『第一書房 長谷川巳之吉』、135頁に記している。「それまで若い評論家の十返肇が臨時に編集して、すっかり昔の面影をなくしてみた「セルバン」改題の「新文化」の編集をまかせられた。それまで小山書店でも「新風土」といふ雑誌を編集してみたので、その経験を生かしてわたくしは「新文化」を自分の責任雑誌とするために努力し、木下空太郎や高村光太郎まで動員した。そのせみか、それまで五千部に落ちてみた「新文化」は二ヶ月もするとまた一万を出すやうになつた。」
- 222 村野四郎「梅」『新文化』通巻第157号 (1944年2月) 38。これは、そのまま『故園の董』(みたみ出版、1944年1月20日) 32-34頁に収録された。ただし、漢字に誤植あり。
- 223 村野四郎「祖國への郷愁 現代詩再建に關する覺書」『故園の董』130-139頁。
- 224 同上、132-133頁。
- 225 村野四郎「方眼紙の海 工場のための朗讀詩」『故園の董』、111-116頁。末尾に「(朗讀詩 AKより放送)」と附記。
- 226 坪井秀人「附録 朗讀詩放送の記録」『声の祝祭 日本近代詩と戦争』、31頁。この日のもうひとつの作品は、1942年秋ソロモン沖で戦死した弟、五郎を唄った、「海の聲 三等兵曹なる弟の靈のために」(『故園の董』、7-11頁)。この「海の聲」は声優によってすでに何度か朗讀されていたが、村野の朗讀としてはこの日が最初の放送であった。

- 227 村野四郎「祖國への郷愁 現代詩再建に関する覺書」『故園の董』、133-134頁。
- 228 同上、136頁。
- 229 長谷川巳之吉「第一書房廢業御挨拶」『新文化』通巻第158号(1944年3月)、1。
- 230 野田宇太郎「後記」『新文化』通巻第158号(1944年3月)、66。
- 231 鮎川信夫「戦中手記」『鮎川信夫著作集』第7巻(思潮社、1974年)、261-266頁、および、鮎川信夫「事實証明書」『鮎川信夫著作集』第8巻(思潮社、1976年)、91-93頁を参照。「事實証明書」の初出は、『ユリイカ』1972年7月号。
- 232 鮎川信夫「事實証明書」、93頁。
- 233 鮎川信夫「神の兵士」「病院船日誌」『詩と詩論』第1集(荒地出版社、1953年7月)、38頁。
- 234 参照、“The Empress of Asia” [The Wallace B. Chung and Madeline H. Chung Collection] University of British Columbia Library: <http://www.library.ubc.ca/chung/voyages/voyages2.html>, and “Sunken Treasure: Empress Reigns Again At Museum,” *The Straits Times* (April 8, 1999): <http://web.singnet.com.sg/~twells/news096.htm>.
- 235 田中祐三「榛名丸」「戦時下に喪われた日本の商船」「近代化遺産ルネッサンス」、<http://www.aa.cyberhome.ne.jp/~museum/19420707haruna/haruna.htm>。
- 236 三浦明男『北太平洋定期客船史』(出版協同社、1994年)、205頁。
- 237 白神鑣一[中桐雅夫]「自序」『海軍の父 山本五十六元帥』(矢責書店、1943年10月20日)、1頁。なお、この書については、櫻本富雄『空白と責任 戦時下の詩人たち』、181頁以下を参照。
- 238 Fumio Nagasawa 「大正時代欧州航路1」「なつかしい日本の汽船」、[http://member.nifty.ne.jp/jpnships/taisho/taisho\\_oshu\\_nyk.htm](http://member.nifty.ne.jp/jpnships/taisho/taisho_oshu_nyk.htm)。
- 239 岡田俊雄編集兼発行「年表」『大阪商船株式会社80年史』([大阪商船三井船舶株式会社、1966年)、844頁、および、Fumio Nagasawa 「大阪商船の南米航路就航船舶」「なつかしい日本の汽船」、[http://member.nifty.ne.jp/jpnships/showa1/showa1\\_nanbei\\_osk.htm](http://member.nifty.ne.jp/jpnships/showa1/showa1_nanbei_osk.htm)。前者では、愛国丸とともにトラック島湾内で空爆により沈没したとされるが、ここでは、後者の記述を採った。
- 240 鮎川信夫「事實証明書」、91-94頁。
- 241 鮎川信夫「アメリカ」『純粹詩』第2巻第7号[通巻第17号](1947年7月)、6-7。参照、拙稿「「アメリカ」再訪」『現代詩手帖』第44巻第11号(2001年11月)、114-122。
- 242 鮎川信夫「一九三〇年代の射程 W・H・オーデンを中心に」『鮎川信夫著作集』第5巻(思潮社、1974年)、251頁。
- 243 Cf. W. H. Auden, “Foreword,” to *W. H. Auden: A Bibliography: The Early Years through 1955*, ed. B. C. Bloomfield (University Press of Virginia, 1964), viii。他に、長田弘「愛 一九三〇年代への一視角」『開かれた言葉』(筑摩書房、1970年3月)、

- 77頁を参照。
- 244 長田弘「愛 一九三〇年代への一視角」『開かれた言葉』、77頁。初出は、『現代詩手帖』1967年9月号。
- 245 いいだ・もも「解説 私たちのオーデン」深瀬基寛訳『オーデン詩集』(せりか書房、1968年1月)、249頁、および、いいだ・もも『われらの革命』(勁草書房、1969年)、300頁。
- 246 いいだ・もも「私たちのオーデン」『われらの革命』、302頁。この後半部分「オーデンの立ちすくみということ」の初出は、『世界詩人全集19 附録』(新潮社、1969年)。
- 247 鮎川信夫「一九三〇年代の射程 W・H・オーデンを中心に」、257頁。
- 248 福岡健二編中桐雅夫訳「もうひとつの時間」『オーデン詩集』[双書・20世紀の詩人7](小沢書店、1993年)、81頁。
- 249 鮎川信夫「一九三〇年代の射程 W・H・オーデンを中心に」、260頁。
- 250 丸善株式会社編『丸善百年史 日本近代化のあゆみと共に』下巻(丸善株式会社、1981年)、1332頁。

## Nobuo Ayukawa and *Shin-Ryodo* (5)

Akira NAKAI

Key Words: Japanese modernist movement in the 1930's, Nobuo Ayukawa, *Shin-Ryodo* (Poetry Journal), *Serupan* (Monthly Journal edited by Yukio Haruyama), W. H. Auden.

Following the “Parco Polo Bridge Accident” in July 1937, the existing Cabinet Intelligence Unit was remodelled into the Intelligence Committee in September, one of the first projects of which was to hold the prize for a marching song, along with the promotion of the National Mobilising Bill. “The Patriotic March” was released by six record companies in late December. Thus, the year 1938 opened with another national anthem.

Commissioned to do a travel book about the East, W. H. Auden and

Christopher Isherwood decided to write on the “war” in China. They left Marseilles in January 1938, arriving at Hong Kong on 28 February, while, in Tokyo, Ayukawa, a newly enlisted member of “*Shin-Ryodo*,” was looking forward to seeing his first poem in the March number. He then set on poems to follow, each subtitled “A Part of the Asia Series,” with patches of indirect reference to the war in a satirical vein, which was the general tactic of the *Shin-Ryodo* coterie. The National Mobilising Act was enforced on 5 May.

“*Serupan*” searched for the reportages by Auden and Isherwood from China in *The New Statesman and Nation* and *The New Republic* respectively. Introducing Isherwood’s “The War in China,” (*NSN*, 25 June 1938) in its September issue, Haruyama noted that those “champions of modern literature” now in Hankou were visiting Japan. And they did: they left Shanghai on 12 June and, on their way back home via Vancouver and New York, stayed in Tokyo on the seventeenth of the month, but in September they were in London, without having met any Japanese poet.

Under the shortage of information from abroad, “*Serupan*” and “*Shin-Ryodo*” longed for new trends in literature, particularly that of Auden and his group. Auden’s “September: 1939” was found in the *NR* (28 Oct. 1939), and immediately translated in the January number of “*Shin-Ryodo*” in 1940. And other than Connolly’s “The Ivory Shelter” in the *NSN* (8 Oct. 1939) translated in the February number of “*Serupan*”, there was another small article, in *The Time* magazine (30 Oct. 1939), to tell about Auden’s “exile”. “*Shin-Ryodo*” published its translation in the February number. A passage reads:

Auden told a reporter that he saw one hopeful prospect from the “muddle” in Europe; a general realization that violent revolution is an impotent as violent war. Said he: “In America nationalism doesn’t mean anything; there are only human beings. That’s how the future



must be. . . .”

This would make a complementary note to Auden’s new poem. Auden, an “Exiled Thucydides,” sang in the country of “democracy”:

The lights must never go out,  
The music must always play

In July the “New Order Movement” was declared by the cabinet, and the Japan-Germany-Italy alliance was to be signed in September. Ayukawa, in a country where “nationalism means everything,” responded in his “*Inei* (Shadow)” dated 30 August 1940:

But I wish the music always played  
Someone whispers in a husky voice

Along with the cabinet program the “Imperial Rule Assistance Association” was established in October, and in December the Intelligence Committee was again remodelled into the Intelligence Bureau. Almost all branches of socio-political arrangements were restructured, and literature was not an exception.

After several meetings the Japan Poets Association was founded in December. The Tokyo Poets Club (founded in February 1936, and now comprising some active members from *Shin-Ryodo*) disbanded itself to take part in the association. The first article of its “platform” defined the function of poets: to devote themselves to the creation of a sublime national spirit. To celebrate its inauguration, the Poets Festival was held on the 30 January 1941.

It was in September 1940 that Haruyama was dismissed from “*Serupan*”. He then concentrated his energy on “*Shin-Ryodo*”, but it was already in its

final stage. “*Shin-Ryodo*”, inaugurated in May 1937 to establish a new country for poetry, ended with the April issue of 1941.

After the outbreak of war in December, the Patriotic Meeting of Men of Literature proposed yet another association, which, with the aid of the Intelligence Bureau, was to be realized, in May 1942, as the Patriotic Association for Japanese Literature. The Japan Poets Association was disbanded to form a Poetry Division of the Association. In October Ayukawa was conscripted, and left for Sumatra in the south sea in April 1943.

On 3 May 1947, the Constitution of Japan became effective. To his “America” Ayukawa put the date “5.30,1947.”

The lights must never go out  
 The music must play on  
 “America. . . .”  
 Suddenly I glow white  
 I get excited, cannot stop

Having gone through the “muddle,” Auden’s lines were now echoing in a new country of democracy where “nationalism doesn’t mean anything.”